
エラード王国物語 - 異界の魔獣使い -

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エブラーード王国物語 - 異界の魔獣使い -

【Zコード】

N1933Y

【作者名】

hir033

【あらすじ】

魔道船の事故に巻き込まれ大河に投げ出され、『死に戻り』・『黄泉返り』と呼ばれる現象により契約していた精霊とは契約廃棄となり、気づけば猫型魔獣と小人族に懷かれることになり、エブラーード王国を中心に物語は進みます。

異界の魔獣使い - プロローグ - (前書き)

はじめまして初投稿です。最後まで続けるようにがんばります。投稿できる時が不定期になると 思います。感想いただければ嬉しいです。

異界の魔獣使い・プロローグ・

プロローグ

その日、王都エーブラード付近にて前代未聞の事故が発生した。

魔道船・方舟ヴァンガード・最大収容人数1500人

事故当時の乗員乗客は1300人

巨大な飛行船ヴァンガードは

王都を出発後、乗員乗客を巻き込み大河へと墜落する。

死者行方不明者1246人生存者54人と言われ、今世紀最大の魔道船事故として

後世の歴史書に記されることとなる。

乗員乗客にとって不運だったのは、ヴァンガードが大河ではなく大地に墜落

していればまだ生存者が多かつたはずであった。

本来ならば墜落しても生存できるように、魔道師が施した魔方陣により乗員乗客の

命が助かつたはずなのだが、墜落した場所が悪すぎたのだ。

大河ムーリルヴァの川のど真ん中へと墜落し、

乗員乗客1300人を乗せたヴァンガードは大河に沈んだのだ。

泳げる者がいても大河に住む水棲の妖獣、魔獣の餌となり、運の良い乗員乗客で

幸運だつた泳げる者と、「ごくわずかな魔道の使い手のみが生存することが出来たと
言ひ、史上最悪な大規模事故であつた。

岸からの救助を行おうにも、大河にいる数多の水棲の妖獸、魔獸に
より近づくことも

出来ず大河は乗員乗客の阿鼻叫喚と水棲の妖獸、魔獸の歡喜の咆哮
が続き、

大河が犠牲者の血で赤く染まつたと後世に伝えられた。

魔道船・方舟ヴァンガード・空を飛ぶ飛行船の先駆けであり、
先駆者としてつけられた。

ヴァンガードの名は、皮肉にも後世に大規模飛行船事故における先
駆者として
名を残してしまつたのである。

魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より一月が経った。

王都エブラーードより公式発表として、魔道船・方舟ヴァンガード・の乗客に

五大英雄の一人、傭兵王ルクサス公の孫の死亡を公式に伝えられ喪に服することとなる。

五大英雄とは

傭兵王ルクサス公

騎士王ヴァルチス公

精靈巫女姫ルチア

魔道王ガーリア公

盜賊王マルサ公

の5人を指す。

そして彼らと共に魔族の脅威より世界を救つた救世主として

王都エブラーードの王にして、異界より流れてきたユウキ・スガワラを聖王として

現在の王都エブラーードはまとめられている。

話は一月前に遡る。

大河ムーリルヴァに起きた、魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より数時間後である。

「なんとか岸につかねば」

大河ムーリルヴァに魔道船より投げ出され数時間、今だ大河から上がり流されるまま船の残骸と思われる木片につかまりなんとか生存しているのだが、その命もまもなく尽きてしまつのではないかと、思わずにはいられない。

投げ出された直後は酷い有様だった。

泳げる者は、片つ端から水中へ引きずりこまれ溺死させられ死んでゆく。

魔道船が大河に沈んだことからも、大多数の乗船乗客が今だ魔道船の中にはいるはずだろう、そしてその者達もすべて脱出来ぬまま溺死していくことだらう。

「悪運が良いのか悪いのか…ありえない世界だ」

とりあえず五体満足には生きている。怪我もなく、今の所妖獸、魔獸に気づかれてはいない。

これがもし怪我でもしていれば血の臭いから妖獸、魔獸に襲われていたことは間違いないはずだ。

自分が助かつた理由は、投げ出された直後に余り動かなかつたことではないかと考える。

どれだけ流れこつしているのかもわからず、岸にたどり着くこつも川幅が広すぎるのだ。

流れは緩やかで、周囲に散乱する漂流物を見れば生存している者は自分だけ。

流れに逆らわず、なんとか岸へと近づくこつしているのだが、なかなかに難しい。

頼みの契約精靈を頼るつても、精靈との証である紋様が肌より消えている。

考えられることは、精靈が契約を廃棄したと言つこと。

「まさか死に戻りか」

ありえなくはない。

大河に投げ出されたショックかはわからないが、一時的に心肺停止でもした可能性がある。

契約精靈とは、自分の能力になつてもうつべく精靈と契約することだ。

強制的に契約することと、自然に契約出来る2種類のやり方がある

のだが、自分の場合は前者だった。

自分が生まれた時に、家族が強制的に精靈と契約させたのだ。

自分としては物心つく頃からいた精靈だったが、契約が廃棄された状態だと言つことは自分が

一時的にも死んだからとしか思いつかない。

精靈との契約廃棄には契約した者が死亡した場合と、契約した精靈から愛想つかされるかなだが、

自分の場合は一時的でも心肺停止したからとしか思いつかない。

精靈は契約者が死ぬと契約解除されてしまつため、「死に戻り」、

「黄泉返り」した者は

契約した精靈との契約が解除されてしまい、今まで使役していた精靈が使えなくなつてしまつたのだ。

「死に戻り」、「黄泉返り」はそれほど珍しいことではないのだが、噂では冒険者や傭兵、

騎士がそうなつてしまつと、今までのように活動することが難しくなるため、新たな精靈と

契約しなおさなければならなくなつてしまつとの話だ。

「なるよつにしかならないかもだが、諦めるのも癪だ。こんな面白そうな世界だし」

死ぬかもしれないと、諦めるのは簡単だ。

だが、こつして生きている以上命を捨てる気もないのも確かだ。

そろそろ掴まつてゐるこの木片よりも、安定した大きさの浮遊物はないかと周囲を見渡せば、樽が浮いてゐるのが見える。

掴まるのは不安定があるが、確實に沈まないものとなるとそれくら

いしか見当たらぬので、移動する。

樽は自分がなんとか抱え込める大きさだつた。

これを浮き輪にすこしづつ上がれそうな岸を探して移動する。
どれほどの距離を、流されているのか分からぬがなんとか移動する
ことは出来そうだ。

『……フギヤ……』

掴んでいる樽の中から何かの声が聞こえた。

「？？？」

空樽ではなかつたのだろうか？

『だくら……で……』

声は動物のよつたるもの？と言葉のよつたるもの？が聞こえるのは氣の
せいだらうか？

「樽の中に誰かいますか？」

「ン」と樽を叩いてみる。

何も聞こえず、自分の氣のせつらじい。

「長時間の漂流での幻覚か……」

低体温状態になりつつあるんだろうか、これは早急に岸めざして上
陸せねばと考える。

「幻覚酷くなる前に岸田指すか。ここまでくればこれに掴まる必要
なさそうだしな」

樽からはなれて泳いで岸を田指す」とした。ここまでくれば妖獸、
魔獸の気配が薄い。

『まつ！待て……』

『どうやら空樽には誰かいたらしい。

「こんなにちわ。誰かしりませんが、人間じゃなさそうです」

『お願い岸へ一緒に…』

樽の中に何かいるか分からぬが、同じ魔道船に乗つていたよしみで樽ごと岸まで泳ぐことに変更する。

「とりあえず岸まで、なんとか泳ぎつゝようとするので、無事ついたら樽から出してあげます。ただし裏つてこないで下さい。人族じやなさそうだし」

『分かつた…』

何が樽の中にはいるのか気になるところだ。

異界の魔獣使い1（後書き）

続いて投稿です。よろしくおねがいします。

たどり着いた岸辺は、漂流物がたどり着きやすい形状になっているのか、

そこかしこと魔道船の残骸や荷物とおぼしきも物、余り見たくはないが入だつた物の一部が流れついている。

「さすがにきつい……」

なんとか樽を抱え、やや開けた場所へ移動した。あとで流れ着いた荷物を確認してみようと思うが、濡れそぼつた服が気持ち悪い。

「樽開ける道具探すので、待つててください」

自分の持ち物の確認が先だ。

腰に挿したはずの精靈憑きの剣は、やはりない。腰に付けた冒険者用の道具袋2つは無事だった。

これは一部の高レベル冒険者のみが、所持出来る道具袋で重さを感じずを持ち運び

可能なため旅の必需品だ。

これを作つた者に気に入られないと手に入れられないと言つ物である。

これが流されなくて良かったと思つ。

道具袋から、樽を開けるのに使えそうな小剣を取り出す。

「とりあえず開けます剣先に気をつけて」

ぐりぐりと少しづつ樽の縁に小剣を差込なんとか蓋を開ける。

『やつた！出られたわ感謝する人間』

飛び出して来たのは真っ白な子猫？体全体に模様が入つて……

「……驚いた白雪彪^{はくせいひょう}の幼生体ですか」

まんま子猫にしか見えないのだが、知るものが見れば白雪彪の幼生体だと分かるはずだ。

雪山に生息し、その毛皮は王侯貴族に好まれる^{ううき}ランクの魔獸。知能が高く狩るのはたやすくないため、滅多なことでは狩ることが不可能な魔獸である。

『わかるの？』

剣呑な眼差しで見ないでほしい。

「分かる人は分かるはずですね。そのままじゃ何なので、首輪外してくださいですか？」

魔獸用の人には外せない仕様の隸従の首輪が、邪魔だろうと思う。

『えーこれ結構気に入つた首輪なんだけどキラキラして』
見た目は確かに綺麗な宝飾をほどこしているのだが、隸従の首輪で追尾機能付のはずだ。

「付けたいのはかまいませんが、それ追尾機能付で隸従の首輪ですよ。付けた人間が貴方が生きていると分かれば追っ手がくるはずです」

ちなみに人族や人型の者を、奴隸化する首輪は隸属の首輪といい魔獸用の首輪は隸従の首輪と呼ぶ細かな機能の違いがあるらしいのだが、詳しくは知らない。

道具袋から自分の代えの服を取り出しつつ、濡れた服を脱ぎながらそう教える。

『ええつ！外して頂戴！人間！』

知らなかつたのか、外せ外せとうるさい。

「着替えさせてください。まああの事故の混乱で、直ぐは大丈夫なはずです」

なにせあれだけ規模の大事故だ。
どれだけ下流に流されたのか分からぬが、墜落した周囲はすごいことになつてあり、
それどころではないはずだ。

「白雪彪さん貴方の名前は？私は人間と言つ名ではなく、スズ……
いえセルファです。人族の男になります」

『名前なんてないわ。気づいたら人間のどこにいて、あの船でどつか連れていかれるところで……』

なんとか自分に起きたことを説明してくれた。
ハンターにでも生後もなく捕まつたのだろう。

「そうでしたか。では仮の名前を付けてもいいですか？名があるほうが呼びやすいですね」

なんとか濡れた服をすべて脱ぎ着替えの服を着込む。
やはり精霊契約の証は体から消えていると思いながら。

『……出して……』

白雪彪の入つっていた樽からまた声がする。

「どうやらまだ何か入つたままだつたらしい。」

「まだ何かいるようですね……」

『忘れてた……』

白雪彪は自分が入つっていた樽に顔を突っ込んで、何かを銜える。
樽には何がいるんだと、セルファアがみれば、小人族3名と何か分か
らないコブシ大の卵が1つあつた。

異界の魔獣使い2（後書き）

連続投稿です。

「野営の準備した方がよそそうです」

白雪彪が気になるが、詳しいことは野営準備を整えてからのほうが安全だらう。

「白雪彪さん詳しく述べ野営準備後と言つことで、この場所は完全に安全かわかりませんので少し移動します」

まあ逃げたきや勝手に逃げてくれてかまわないのだが、くつろげるよう野営準備してからで遅くないだらう。

セルファは野営準備の為に、道具袋から結界石を4つ取り出す。精靈契約が切れてしまい、精靈魔法が使えなくなってしまった不便さは多少あるのだが、結界石さえあれば周辺にいる魔物を寄せ付けることはないだらう。

ただし、すでに結界の中にいる魔物に関してはその限りではないが野営準備に必要な広さの四方に石を置き。中心に魔よけの魔方陣を展開させると、大人が3人余裕で眠れる大きさのテントを取り出し設置する。

テントの幅を利用して紐を結び、濡れた衣類をそこにひっかけ濡れた衣類をそこで乾かすことにする。

魔方陣からそれほど離れていない場所に火の準備をすることにして、その辺に落ちていた枯木を集められるだけ集め、簡易竈を作るための石もいくつか探し出し準備する。

「こんなもんかな」

安全面が気になるところだが、とりあえずは休む必要があるだろう。

『セルファ感謝するわ。人間でも良いやつはいるのね』

隸従の首輪をはずしてもらつて白雪彪は、毛づくろいしつつそう告げる。

「さてそれはどうでしょ。それよりも、これからどうしますか?」

所持していた簡易食で簡単な食事をすませ、ぎこちない様子の小人族へ聞く。

樽の中にいた小人族は女の子2人と男の子1人だった。

お姉さんな感じがエル、やや恥ずかしがりな子がミル、男の子はカイと言つ名で

白雪彪の世話をする為に船に乗せられたらしい。

彼らも無理矢理、住み慣れた森から連れ去られ人間に隸属を強いられたらしい。

「王都では隸属する者は、犯罪者以外は禁止されたはずですが、

『でも馬鹿はまだまだいるよつです』

『セルファさんありがとつ』

『ありがとな』

『ありが…といひやないます』

助けてもらつた礼を言われるのは悪い氣はしない。

小人族をこうして近くで見るのははじめてだが、なかなかに小さく愛玩用に

隸属させたくなる気持ちも分からなくはない。が、セルファ自身隸属することには反対だ。

人であり他種族であるうが、犯罪者でない限り隸属し、自由を奪つ權利はないと思っているからだ。

『セルファ、名前頂戴。名無しはなんか嫌だし』

「そうですね。貴方は白雪彪ですし、安直ですがシラコキはどうでしょうか？」

異界語の言葉ですが、白い雪と言つた意味ですが

異界語、聖王と呼ばれるコウキ・スガワラの故郷の言葉だと教える。

『シラコキ…私はシラコキ！わかつたわ』

「気に入つたようになによりです。省略して呼ばせたければコキだけでも良いでしょう』

『セルファさん助けて貰つてなんなのですが、お願ひがあるのですが』

小人族のエルがそう告げる。

「なんでしょうかエルさん？」

だいたい何が言いたいか分かるような気はするが、セルファは聞いた。

『森へ帰りたいのです。私たちが住むエザイラの森へ・・・連れて行ってくれませんか』

やはりと思う。元居た場所へ戻りたいと誰もが思つことだ。

「...残念ですが、今は無理です」

そう言われた小人族が泣き出すのは当然で、助かった喜びもつかの間奈落へと落とされた気分だろう。

異界の魔獣使い3（後書き）

連続投稿です。よろしくお願いします。

『ちょっとセルファ、そんな言い方な…』

怒ったシラユキがガシガシと、セルファの腕に噛み付いてくる。シラユキに噛み付かれるのは痛いが、生きた毛皮の手触りは格別なものだと思つ。

「泣かないで、今はと言つただけです。痛いですよシラユキ！ こっちの理由も聞いてからにしてください」

こんなシラユキはかわいいなあと、のんきに思いつつも、現在の自分の状況を話すことにした。

「見て分かると思いますが、私は人族で本来なら精靈魔法を使用していました。精靈魔法は誰でも使えるようになるわけでないのはわかりますか？」

『わかる…私たち捕まえた人間は使えなかつた。雇われた冒險者が使つていたのは見た』

ミルが泣くのをなんとか堪えつつ呟く。

「人族では、冒險者になるのはだいたいが精靈魔法が使える者や魔獣使いだけです。私も冒險者ですが、コレを見てもらえますか？」

道具袋から取り出したのは、冒險者ギルドのランクカードだ。

セルフア・?????????

AGE :	112
SEX :	?????
JOB :	?????
HP :	?????
MP :	?????
INT :	8064
DEX :	216
VIT :	537
STR :	142
AGI :	467
LUK :	723

称号 : ????

契約精靈 : ????

冒險者ギルドランク : ????

『…年齢112！つて人族じゃ。他も人族じゃありえない…』

カードを覗き込んで見るカイがありえないと叫ぶ。

「ええ、カードがバグっています。本来ならこんな数値はありえないのですが、

私のこの体の年齢は19です…」

普通ならギルドカードがこのようになることはありえないのだ。

「今は無理と言つた理由がコレです。困つたことに今の私では精靈

魔法も使えません」

さてどうしたものかと思つ。

カードを見た限り表示されている数値はめちゃくちゃだし、自分のギルドランクさえ分からぬ状態になってしまつてゐるのだ。

『死に戻り……ですか？』

エルがそう呟いた。

「知つてましたか。多分としか言えないのですが、こうなる前に私は複数の精靈と契約してました。着替えた時にすべて確認しましたが、契約していた精靈の紋様はすべて消えています。今の私では、貴方たちの言うエライザの森へ辿り着くことは非常に難しい。なので今は出来ないと告げただけです」

依頼されてエライザの森まで向かうのはかまわないのだが、精靈無しでは無理としか言いようがないのだ。

エライザの森は最低でもBランクの魔獣が出没するし、個人で行くのは難しくどうしてもチームを組まないと無理なのである。

「可能なのは、ふたたび契約してくれる精靈を探してからとなります。それが何年かかるかわからないので直ぐは無理ですし、早く帰りたいと思うのであれば、私など無視してランクの高い他の冒険者に依頼するしかないですね」

「死に戻り」も困つたものだと思つ。今までしてきたことがすべて张家界になるのだから。

ただ「死に戻り」にも1つだけ幸運が付けられる。精霊契約を廃棄される代わりに、あることが戻るのだ。

それを今は、セルファも話すつもりはない。

『ねえねえ：セルファ契約って他のとは出来ないの？』

シラユキがふと魔獣である自分の今を考えて思う。

自分はかなり珍しい魔獣と言うのをセルファから聞き知った。

今の状態では、また誰かに連れ去られる可能性もあるんじゃないだろうか…

どこから連れ去られたのか、両親の居る場所さえ分からぬいし、これから何かをすると言つことも思いつかない。

「精霊以外でも出来ますよ。魔獣使いと言つのもありますし……契約ですか」

シラユキを見て思うこのままでは、シラユキも危険に晒されるだろう。その希少性をゆえにだ。

『はーい…ならアタシ、シラユキは契約する！セルファとなら契約！珍しい魔獣は誰もが欲しがるならセルファがいい！』

狙つた獲物を離すまいと、爛爛と目を輝かせたシラユキが言つ。魔獣らしくないのは、生後まもなく連れ去られ人間と過ごしてきたからだろうか？

いや小人族の3人が、世話していたからだろうか？
こうも魔獣らしくない話し方をするのは魔獣は始めてみる。

「シラコキ契約は一生ものですよ。魔獸としての自覚はないのですか」

本来、このように棚からボタモチ的な幸運などありえないのだ。

まだ幼生体だが、SSランクの魔獸だ。

これが成長しきった時の成体の姿を思つと、どれだけの人族が欲しいがるだろうか。

SSランクの魔獸を所持する魔獸使いとなると、片手分もいないだらう。

「契約すれば、死ぬまで私に使役されることになります。まだ幼生体である貴方に、その意味が分かると思わないのですが、かと言つてこのままでは貴方を連れて歩くのは危険だらうし…」

セルファアは考えこんでもどうも出来ないことに、シラコキと契約するしかないとわかつっていた。

『なあ兄ちゃん。こいつも契約できなーいか?』

話をずっと聞いていた小人族のカイが、樽からだした。謎の卵を転がしながら聞いてきた。

「カイくんそれは、非常食とかじゃなかつたのですか?」

てつくり大きめ卵を、非常食として持ち込んでいたのかと思つていたのだが違つたようだ。

『違うよ。俺たちを捕まえた人族のおっさんがさ。こいつも世話をろつて渡されたんだぞ。逃げるときに大河に沈んだら可哀相かと思つて一緒に連れてきたんだ』

かなり重くて苦労したらしいが、なんとか転がしてこじこまで運んだと言つのが卵の真相らしい。

『LJの子まだ卵だけど、私たちとは会話できた……』

ミルが卵をなでてあげている。

小人族が世話をしていたのは、卵に話しかけたり時折卵を動かしたりくらいだと言つ。

「これ何の卵なんですか？卵生の生物となると、孵化すれば出てくるのは鳥類か爬虫類か両性類？」

卵の殻の色はやや薄くブルーが入つてあり、水の属性の卵だらうと予想がつくくらいで、何の卵なのかもサッパリ分からぬ。

「孵化するとしても、いつか分からぬ上に、どのような状態にしておけばいいのか……」

何の卵かも、わからないのでは対処が難しいではないか。

『この子、自然の氣を吸つて育つ珍しい生物としか言われなかつた。卵の殻が割れる時は孵化する時で、それまではどんなに高い場所から落としても絶対に割れないつて』

エルたちは、この卵を人族のおっさんが実際に割つてみせる感じで硬い石畳とかに落としたりしたのを見たのだと言つ。孵化する時に最初に見た相手に懐くらしいので、余程のことがない限り危険はないらしいとのことだ。

「そうですか。孵化しなければ契約もなにもありませんので、これ

は孵化するまで様子みるしかないですね

生きている卵を道具袋へと入れるわけにもいかないだろうし、セル
ファは卵入れでも作って運ぶかと考えた。

魔方陣が作動しているとわかつてはいても、大河から聞こえてくる
妖獣・魔獣の鳴き声
にエルがビクビクと反応している。

「火の番は私がしているので、先に寝てかまわないと

セルファとエル以外は、すでにテントで眠っている。時折シラユキ
とカイの寝言が聞こ
えてくるくらいで、ミルは寝相が良いのだろう静かなものだ。

『大丈夫です。セルファさんこそ助けていただいて、本当に助かり
ました』

改めて御礼を告げる。

「たまたまあ互いに運が良かつただけのことです」

気にしなくて良いとセルファは告げる。

『それでも、お礼は言わせてください』

「貴方は律儀な性格のようですね。エルさん、貴方は『死に戻り』
をどこで知りましたか？」

焚き火の炎が消えないように、枯木をくべながらだけのことを

知るのか聞く。

『私が捕まっていた人族の所に居たのは、5年ほどです。その期間に二人の雇われていた冒険者が『死に戻り』でした。ミルとカイは、ここ一年の間に連れてこられたのでそのことを知りません』

「そうでしたか。私の方は噂程度には聞くのですが、自分が『死に戻り』だと言いふらすような人物は見かけたことがなかつたですね」
『死に戻り』『黄泉返り』の当たり障りのない話は聞くが、どれだけの者がその状態になつているのかさえ不明だ。

『セルファさん。私が知つていた『死に戻り』の方は一人とも死んでます。自分が変わることに耐えられず死を選んだ。いえ狂つたとしか言い様がない有様の果てに死にました』

セルファも『死に戻り』だと言つのなら、そうなつてしまつておかしくないのだとエルは言つ。
助けてくれた恩人があんなのは辛すぎる。

「大丈夫。エルさん貴方には話しておいた方が良いのではないかと、考えてはいるの
ですが、今はまだその理由を話せそうにないです。ただ確かに『死に戻り』は
変わります。以前の私であれば、このように『私』と言つた話し方はしませんでした。

年齢相応に『俺』と言つていたはずなのですが、気づけば私と言

方を変えています。

『死に戻り』の影響でしょうね』

同じように『死に戻り』の果てに狂い死にした者たちは、変わらずに恐怖したのではないかと考える。

適性があるかないかの違いなのかわからないが、それくらいしか思いつかない。

『わかりました。セルファさん。いずれは話してくださいね。』

「ええ いずれ話せる時がきたら話します。おやすみなさいヒルさん
明け方までセルファは魔方陣と周囲の様子をみつつ静かな夜を過ご
す。」

いつの間にか転寝してしまったらしい、うつすらと空は明るくなり
つつあるが大河のすぐ側のせいか

朝靄が川面を隠している。

焚き火は消えかけ燻つていた。

夜に聞こえていた妖獣・魔獣の気配も消えていくように見えるが、
水辺に近づいてきた獲物を狙い
潜んでいる可能性もある。
無闇に水辺に近づかない限りは安全だろう。

『おはよ〜』

シラコキがテントの中から出てきて猫科特有のじぐさをしながら、

大きく伸びをしている。

後ろからエルとミルが田を擦りながら起きてきた。カイはまだ寝ているようだ。

「おはよう。朝の準備はするので、死にたくないれば水辺には気をつけてください」

『????なんで?』

首をかしげるじぐわが可愛らしい。

「水辺に水を飲みにきた獣がいたとします。それを待ち伏せしている水棲の妖獣・魔獣の餌にされたいならお好きにござつわ」

『.....』

自分が引きずりこまれることを想像してか、ブルブルと震えてうなずく。

「ただし、後ほど水辺に流れ着いていた荷物を見にいきますからそれまで近づくのは我慢してください」

流れ着いた魔道船・ヴァンガード・の積荷の一部を確認しておきた
い。

「今日もここで過ぎします。ある程度の準備をしないことには移動は無理です。そつそつシラコキこれを」

隸従の首輪と言われ外した首輪だつた。

「解析して分かつたのですが、隸従の魔方陣と追跡の魔方陣を組み込ませていたのは真ん中にあった大きな宝石だけでしたので外してあります。いずれそこには別の宝石いれてあげますので、残りは普通の首輪として使えます」

『わ〜い……そのキラキラつけて』

『どうやらシラコキはキラキラしたものに目がないようだ。

「そして、エルにミルこれを」

差し出されたのは小人族サイズに作られた小さな三つの簡易リュックだつた。

「見張りが暇すぎて、卵入れ用の袋作るついでに作りました。今はまだ入れられる物がそうないと 思いますが、おいおい自分の物が増えると思うので使ってください」

『セルファさんありがとう』

エルが嬉しそうに言う。

『……セルファさんお母さんみたい』

ミルも嬉しいのかもうつたリュックを抱きしめつぶやく。

「私は朝食準備をしますから、焚き火の火の用意をお願いします。」

道具袋から取り出す食材で簡単なスープに、パンとシラコキには肉を炙つたものだけで大丈夫だろつ。

異界の魔獣使い5（後書き）

感想下さつた方、評価してくれた方ありがとうございます。
まだまだ感想お待ちしています。

道具袋から新鮮な野菜を取り出す。

旅立ちで購入したばかりの物ばかりだから、種類はかなり豊富のようだ。

肉類はベーコンと干し肉と生肉が入っている。

乳製品に生卵まで入っているとは侮れない。

用意したのは自分じゃないんだがなと思いつつも、とりあえず作れ
そうな

スープをさつさと作ることにした。

調理用具から調味料まで各種色々入っていた。

これらを道具袋に入ってくれた者は、余程の食い道楽ではないだろうか。

とりあえず時間がかからず簡単なスープを作り、道具袋からパンと
飲み物も取り出す。

「シリユキ、肉は生?少しあるのもつまいと思うが・・・

どのくらいの肉の量を食べたいか聞いてから、何の肉かわからない
が切り分ける。

『生!生がいい』

「わかりました。先にどうぞ」

シラコキの前に生肉を入れた皿を出す。

「エルさん 小さな食器がないので昨夜同様に3人で分けて食べてください」

『ありがとう』『それこます。なにからなにまで。カイもいい加減そろそろ起きなさい。』

エルに起きひるべと揺さぶられカイがやつと起きてきた。

『にーちゃん・・・おはよ』

ふあ〜とまだまだ眠たそつにあぐびをする。

『ほりシャキッとするー。』

『カイは・・・ねぼすけ〜』

ミルが寝起きのカイをからかう。

『ほりちゃんとこれ持つて』

自分たちに合ひサイズに木を削つて作ったスプーンを渡す。

「パンがやや固かつたので、スープに浸しておきました。そのまま

食べてみてください。」

飲み物は、なんとかコップになりそうな木の実の殻を利用して、そこに入れた。

「食べながらで良いので聞いてください」

セルファは、食後は川辺に行き、流れ着いた荷物を確認し、それが終わったら今後、どう行動をしたいのか話し合ひので考えておいて欲しいと告げる。

『「」一ちゃん。これうめえな
カイが、なかなか噛み切れないのかベーハンの塊に苦労してひつ
だ。』

『そういういえばセルファさん。家族に無事は伝えなくていいのですか
？』

自分たちと違つて、セルファには心配してくれる家族がいるのでは
ないかと思つたのだ。

「・・・ううですね。確かに身内はいますが、今は不味いです。見つ
かつたら確実に軟禁されます！」

『軟禁！』

なにそれどこの犯罪者？

「ええつ。私の場合は、そこそこ良い家柄もあつて『死に戻り』し
たと知られたら軟禁されるのは確実です！」

精霊契約が廃棄されたのは、身内には即わかつたはずだ。

自分が死んだと精霊が判断した時点で、精霊憑きの剣が身内の所へ
戻つたはず。
やや過保護な身内が、なんの精霊とも契約していない自分を外に出
そつとしないだらう』とは確実だらう。

『「」一ちゃんも苦労してんだな』

「ええつ。なので、早急に新たな精霊契約および魔獣使いとしても
使えるようにならないと不味いです」

でないと見つかった時点で、一生閉じ込められる」ともあつたのだ。

自分を心配してくれて、守るつもりなのだろうと分かつてはいてもあそこでは自由は余りない。

『大丈夫。・・・シラコキ、セルフア 守る。』

生肉を食べ終えて、毛づくろいしつつシラコキがそう告げる。

「そうですね。早く大人になって、一緒に訓練しましょう」シラコキの大きさなら、後半年ほどで成長しきるのではないか。それまでに見つからずなんとかしなければならない。

いつそう魔獣使いの里に、住み込んでしまつのもアリではないかと考えたのだ。

異界の魔獣使い6（後書き）

書いていてお腹すいてきました。
どうもなかなか話が進みません。

感想おまちしています。

異界の魔獣使い7（前書き）

前置きが多すぎたのか話がなかなか進みません
どこが魔獣使い?と思われるかもしれません
が
おいおい進んでいく予定です。

太陽が眩しい。

今日も晴天になるようだ。

食事を済ませ片付けを終えたセルファたちは流れ着いた荷物を確認に川岸に向かう。

昨日までは助かることしか考えていなかつたので、荷物が流れ着いているなと思っていた程度だが、大河を見れば今だ色々と流されているようだ。ほとんど見た限りでは魔道船の残骸ばかり。

川岸には流れの関係か、色んな物がかなり流れ着いている。昨日みた、かつて人間だったものの一部とかは消えていた。夜のうちに死肉喰いの妖獣か魔獣が掃除したのだろう。

「運べない大きさの物を見つけたら言つてください。ああ、川には気をつけて」

セルファはポケットからシラユキの首輪に付いていた宝石を取り出すと、

大河に向かつて子供がよくする石を水面に飛ばす石投げをする。綺麗にカットされていた宝石は、キラキラと光ながら何度も水面を跳ね大河に沈むと思われたのだが、

跳ねていく宝石に大口を開けた巨大な魚のような生き物にあつとう間に喰われていた。

「ああなる可能性もあります」

つくづく昨日は運が良かつたと思つ。

犠牲者には悪いと思うが、大河にいた妖獸・魔獸の腹が満たされて
いたから襲われなかつただけ
なのかもしねない。

『すつづー。あんなのがうようよしてんだここは
ヘーとカイが大河を見て言つ。

『もつたいなーい』

あのキラキラ石欲しかつたなあと思つシラコキだが、隸従とか追跡
されるとかの意味を深く
理解しきつていないようだ。

「これで当面は大丈夫か、追手が追跡を辿つても、大河の中と分か
ればそれ以上は探さない。

希少な宝石でもこの中に入り探すのは無理」

シラコキの背に乗る小人族三人は、宝探しだと散らばつた。

「とりあえず運べそなものから見るか」

流れ着いているさまざま木箱を物色する。

見つけた木箱は、はじから道具袋へといれてしまつことにする。
道具袋の大きさから見て普通なら入らないと考へられるものばかり
なのだが、
一部の冒險者ご用達の何でも入るこの袋はかなり便利な品物だ。

貰うにしてもまず売つてない。高レベルの冒険者にしか出回らないことでもって数は少ない。（作られる数がなかなか増えないため、一般にまで出回る）ことがないのが理由なだけだが

あらかた見える範囲にあつた木箱を入れてしまつ。

まだ川岸の水面に漂つてゐる木箱もあつたが、そちらは危険を考えあきらめることにした。

シラコキ達が見つけたものも、どんどん入れてしまつて確認はおいたいすればいいだろ。

道具袋のなかにある限り、生ものだらつが腐ることもないのだ。

「こんなもんですかね。さて今後はどうするか決めますか

『シラコキはセルフアヒトにてく』

『俺たちは、いざれエライザの森に帰れりやしつでもいひつて話し合つた。

こうして生きてゐだけでも運良こし、二一ちゃんに付いてくのも面白やうだしな』

小人族の三人は、エライザの森は直ぐには無理と理解して話し合つて決めたことを告げる。

「わかりました。とりえず何年かかろうが、いざれはエライザの森へ連れて行くことを

私は約束します。そしてこれを見てもらえますか

道具袋から取り出したのは、Hブリード王国のおおまかな地図だった。

大河ムーリルヴァはやや太い線でかかれており、王都エブリードの位置が確認できる。

「私たちが流された大河ムーリルヴァですが、現時点ではどの場所に居るかわかりません」

王都エブリードから、大河ムーリルヴァの下流にある地方都市ムルヴァーラ

「ここのムルヴァーラの方が近いはずなので、ここを田指します。魔獣使いになるためのツテはあるのでその辺は大丈夫かと思いますが、

何年かかるかわかりませんが魔獣使いの里へ行き
訓練することになるので、シラコキ覚悟しておいてください」

『セルファさんツテって、このムルヴァーラに魔獣使いの知り合いの方でもいるのですか?』

「ええ。友人が住んでいます。黒い狼系の魔獣を使うんです
がね」

ムルヴァーラまでは空からの魔道船なら半日、馬車で3日、徒歩で1週間ほどの距離になる。
かなり流されていたので、徒步の半分ほどの距離を歩けばたどり着く可能性が高いと考える。

大河ムーリルヴァに平行した石畳の道が整備されているため、迷うことはない。

道中の妖獸・魔獸に夜盗さえ注意していれば良いだけだ。

「本来なら、この大河ムーリルヴァを船に乗り下る手もなくはないのですが、

そのための大型船もなければ妖獸・魔獸除けになる魔方陣もないためできません。

ここは地味に歩くしかないです」

こうして大まかな方針が決まったことで、セルファは魔獸使いになるべく進みはじめることとなる。

異界の魔獣使い7（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

感想、誤字、文法の間違いの指摘ありがとうございました。
おこおこ直していく予定ですので、しばしお待ちください。

「 ムルヴァードまでの距離は、おおよそ一町で済んだ。

一町はなんとか歩き、一町の途中で荷馬車に乗車できたからだ。

綺麗にならされた石畳の道を歩いていると、ムルヴァードまで戻るらしい荷馬車が近づいてくる。

「 あんちゃん、乗つていくかい？ 後ろなら乗せてやるぞ。魔獣使いとみたが… 」

人が良さそうなおじさん、荷馬車を止めてくれた。

「 ありがとうございます。たいしたお礼もできませんが、かわりにこれをどうぞ 」

渡したのは、荷馬車利用する時の大体の料金分のお金だ。

「 まだ見習いで、これからこの仔の訓練に向かうんですよ 」

噛み付かないし可愛いものですよ。頭なでて見ますか？と差し出す。

シラコキには先に愛想良くするよつて言つて貰めてあるので、噛み付くこともなく撫でられている。

小人族の3人は人族に見つかるとやっかいなため、帽子のなかに隠れてもらっていた。

「 ほほう。なかなか可愛いものだな。これは地蔵の仔かい？ 色が白いよつだが 」

一般的に彪と認識されているのは、地彪である。

地彪は大抵の山林におり、魔獸使いのなかでも良く見かけるのである。

「ええたまに居る色素がない仔なので、体が弱いのが心配なところですねぇ」

大嘘である。希少性の高い白雪彪の仔ですとは言わないが、適当に体が弱いらしい。幼生体だったせいで親が捨てたらしく、運良く手に入れただけ告げる。

「自然の撃も厳しいことだな。さつ乗ってくれ」

荷馬車の主に礼を言つてシラコキを先に乗せると自分も後ろに乗つた。

「そういえばここ数日大河が騒がしかったんですが、何かありましたか？」

魔道船の事故前から、この道を歩いていたんで、大河に浮かぶ残骸とか見たことをはなして様子を見ることにする。

「ああ。なんちゅう名前かしらんが、大型の魔道船が大河に墜落して沈んでよ。乗つていた連中も助かつたのは僅かつてはなしだ」

「へーこの大河なんて妖獸・魔獸だらけじゃないですか」
おお怖つと身震いするよつた仕草をする。

「んだなあ」

当たり障りのない話を荷馬車の主としながら最近の話題などを聞いて過ごしたのだ。

荷馬車の持ち主から聞いた話では、王都周辺は一時混乱で凄いことになつたらしく、大河の妖獸・魔獸討伐に冒険者ギルドやら騎士ギルドに傭兵ギルドまで招集されたようである。

それでも討伐以前に、ただ見ているしかない状態だったようで、数少ない泳いで助かった者たちの支援に尽力していくとのことだった。魔道船に乗つていて転移の魔法を使えた者だけが無傷で助かったようだとのことだが、ほとんどがお貴族様だけであり一般の平民は絶望的のことだ。

「まあ、死んだと思われてるかなこれは

荷馬車の主に聞こえないように咳いた。

セルファは連れ戻されない為にも、適うなら再度の精靈契約と魔獸使いとしても使いこなせるようにしようと改めて思うのだった。

『きゅ……う？』

何か言いたいらしいシラコキだが、他人が居る前では彪らしくするよつ言い含めてあつたのでしゃべることはなしがかなり不満そうだ。

「今も王都は混乱してるかもしんねえなあ。犠牲者半端ないって話だ。身元確認しようにも妖獸・魔獸の腹の中か、船に閉じ込められたままの溺死だらう魔道船を引き上げるのも無理つて話なのと、流された積荷を入れようとした馬鹿者が餌食になつたって話も

聞いたしなあ

荷馬車の持ち主と世間話に講じつつ、最低限の情報を手に入れたセルフアだつた。

ムルヴァーラには夕暮れ前になんとか到着をした。

「おじさんありがとうございます。思つていたよりも早く到着できた

「良いじつでことよ、いついちも臨時収入入つたよつなもんだしな。またなにいちゃん」

去つて行く荷馬車に手を振り、魔獸使い、ギルドへ向かうことにする。夕暮れ前のムルヴァーラは、家路を急ぐ者や歓楽街へ向かう冒険者の姿があちこちに見えた。

「さてシラコキ良い仔だ。もう少しの辛抱だから我慢して

『一、二、三……』

シラコキを誰かに盗まれても困るので、抱っこひもつ移動する。

ムルヴァーラの門をくぐり、道の両脇に並ぶ露店を眺めつつ広場の方にまっすぐ進んで行く。

夕暮れ前にもかかわらず、露店を営業する商売人たちは、大声を上げおのとの商品を売り込むことに余念がない。

「魔獣使いのギルドはつと……」

確かにこの先の広場に入つてさらに右の道の奥の方だったはずだと、記憶を確かめ進む。

抱っこされたままのシラコキは、珍しさから周囲をキョロキョロと見回している。

見れば魔獣を連れた者たちがかなりいた。

狼、獅子、熊、彪、蛇、龍と見かけるのだが、どれも厳しく躊躇されているのか飼い主の側でおとなしくしている。

周囲も慣れているのかビクついているような者はいない。

ただ街中だけあって、用心の為なのか、大型の魔獣は口輪を付けている。

「驚いたかい？」に出身の魔獣使いは、エブラード王国一と言われている」

ムルヴァーラの四分の一の大きさを占めているのが、魔獣使いギルドなのだ。

いわばムルヴァーラは魔獣ギルドの為にある都市であった。

危険の大きい魔獣が人が大勢住むような場所で、絶対に暴れたりしないように厳しく睇けて管理されているのだ。

広場から右の道を更に進んでいけば、獣特有の臭いがする。この道を入ったあたりから、魔獣を連れている人しか通らないようだ。

魔獣使い、ギルドは、扱うのが魔獣だけあるせいか、かなり大きな地所を所有しているのか、用心の為かぐるりと門で囲っているようだ。扱っているものが魔獣である以上、何が起こるかわからないからだろ？

門には見張り番が立っているが、特に声をかける必要もなくそのまま進む。

魔獣使いギルドと呼ばれる建物には、初代の設立者が所持していたと言つ

狼を模した旗がかけられており、面白いことに5階建ての建物に入り口が3つほどあった。

それだけでなく、見える範囲では夕暮れの訓練を始めるのか複数の魔獣使いが

訓練棟らしい小型の「ロッセオのある方へと向かう姿も見られる。

そして上空からは時折、大型の鳥や龍といった飛行可能な魔物が降下してくる姿もみられた。

「もう少しだけ黙っていて」

入り口が3つあるが、ビルから入っても良いよつだ。

魔獸によつては、やはつどつしても相性があるのかどんなに躊躇しても、ここでたまたま会つた魔獸同士で喧嘩しないとは言つてきれない状態になることも、あるよつで、出入り口を増やすことでかちあわないよつて仮をつけているのだ。

比較的小型の魔獸を扱つ受付に向かう。

「すみません。ギルド長に会いたいんですが、居ますか？昔馴染みなんで会つて話したいことがあるんで」

受付に居たのは犬耳を持つ獸人の男性であつた。

受付業務は、魔獸を扱つことを考えて、男性しかしていよいよだ。奥の事務処理や喫茶する場所では女性も働いているのが見え人族だけではなく、ちらほらと獸人などの姿も見えた。

『少々お待ちください。…ギルド長ですが、現在は魔道船の事故処理の支援のため王都エーブラードにいるよつです』

管理職の予定表の見てそう告げる。

「タイミング悪かつたか。そうですか、なら不在のギルド長の補佐に誰がここにいるか分かりますか？」

『ギルド長の妹さんの、Hスティアさんですね』

「わかりました。エスティアとも昔馴染みなので、面会出来るよう元話通してもらえませんか？会いたくないと言われても、会わないと絶対に損すると云ふして

くれば会おうとしてくれるはずなので、」

『かしこまりました。面会用に、そこに見える階段で2階に上り左側を進んで行くと、6と書かれた扉の部屋がありますので、そこに入りお待ちください。』

受付に礼を言つてセルファはシラコキを抱えなおすと、言われた部屋へと向かう。

シラコキと言えば、見るものすべてが珍しいのかキヨロキヨロと話しなく首が動いている。

色んな種類の魔獸使いを見るのは、このギルドだからだろう。小型から大型までかなりの種類の魔獸が見れるのだ。

時折、魔獸の唸り声が聞こえるが皆慣れたものだ。

「ふう。なんとかここまで無事着いた。お疲れ」

エスティアが来るまで椅子に座り待つ。かぶっていた帽子を側のスクに置いた。

『すげーなにーちゃん。魔獸だらけだ』

『ごそごそと帽子から出でくるのはカイだ。エルはミルが出てくるのを手伝つている。』

「その為の、ギルドだしね。シラコキも良い仔だ。魔獣は、喋れる個体もいることはいるんだけど、流暢すぎるのはまずいんだ」

『ふうん。うなんだ。面倒だ……』

ぐぐつと体を伸びしながらシラコキはセルファの横に座り毛づくろいをはじめる。

「だから人が多い場所で喋るなら、カタコトにすることかな。あと

猫科の魔獣らしい

唸り声とか鳴き声かな」

『ニヤア……とかデスカ』

「そうそう。用心しとかないと、シラコキを連れさうつ馬鹿も出でくるからね」

軽く雑談をしていると、廊下の方から待ち人が来たのか騒がしい。

魔道船の墜落事故もあり、今後その処理をどうするのか王都エブライドへ向かった

ギルド長である兄の代わりに、執務室にいるエスティアは、兄が溜め込んだ書類の山にうんざりとしていた。

「だいたいあの人は、なんでこつも毎回毎回私に書類の処理をさせるんだ……！」

兄がきちんと処理していれば、自分がする必要がないものである。

「ノンノンヒドアをノックして、兄の付き人の一人が入ってくる。

「失礼します。ギルド長の昔馴染みと言つ男性の方が訪ねてきます。

話したいことがあるそこの階にある6番の部屋にお通ししてあります」

「え……兄の知り合いなら私はパス！面倒くさい……これ見なよ。この仕事の量！」

人に会うことまでさせんなど、バンバン叩いて机の上に溜まる書類の山を見せて詰つ。

「ですが、その方はギルド長だけでなく、貴方とも昔馴染みらしい

ので、会わないと

絶対に損をするとおっしゃっていたそつなので、会つだけ会わないと困るかもしません』

「なにその謎かけ……。ん……しゃあないわ会つか。んじゃ行ってくるから、

書類処理の終わつたものは机の上の処理済棚にあるから後の処理よろしく～」

ヒラヒラと手を振つて執務室を出る時に、部屋に居たエスティアの魔獸が肩に乗つてくる。

『エスティア、ドコイク?』

「知り合いが訪ねてきたりしくてや、これから行くとこだよ。ステラ

『ラ

肩に乗つてきたのは鷲型の魔獸だ。この魔獸の特徴は自分の大きさを自由に変更する

ことが可能なため飛行型魔獸の中では人気の高い種である。当然、エスティアを乗せて空を飛ぶことも可能である。

『…シリアイ?』

「昔馴染みつて言つてたからねえ～まあ友達の誰かだらつた

ステラと会話しながらエスティアは昔馴染みが待つていてると言ひつつ部屋にむかつたのだ。

「誰だい？私に会いたいってのは」

やや不躾な入り方かなと、チラッと思ったがまあ昔馴染みなら気にしないだろう。

「元気そうだね。エスティア……」

「……セルファ！……死んだって聞…いた」

兄からの魔道具を介しての連絡事項の会話でそう聞かされたのだ。

本当に本人なのかと、ガバッと抱きしめ確認をする。抗議のためかステラの声も聞こえていたが無視である。

セルファ本人か確かめるのが先だ。

『ちょっとおばさん！…私のセルファに、抱きつかないでくれる…』

シラユキが邪魔なんですけど、エスティアに噛み付く。

「イタツ……」

『なによー！のむちむちの脂肪の塊で、アタシのセルファに抱きつかないで…』

目の前に現れた人族女、しかもむちむちのでっかい胸！

金髪で、青瞳で、いかにも頭が軽そうな美人にシラユキはシャーツと威嚇する。

「すまないエステイア……」

シラコキの首根っこを掴んで、噛み付いているエステイアから引き離す。

「いや」つちーん、興奮しそうだ。躊躇はないようだねこの仔

ハシ ルートルの鼻の面を並べて置か

『イタツーおばさんなにすんのよ!』

シヤー、シヤーツと首根つこつかまれたまま威嚇しまくるシラコキである。

「ああもう。シラユキ大人しくしないか！」

興奮状態のシトコギを抱いてなおして言い聞かせる。

『アタシ、いのねばさんキライ！』

フンシヒヤウボウ。

「まつたく…とりあえず誰にも聞かれたくない話があるんだ。」この部屋は安全かい?」

まさかいつもシラコキが、エステイアを嫌うと思わなかつた。

「ああ大丈夫だ。しかし死んだと兄から聞いたんだが、何故そう

なっているんだ?」

向かい側に座りつつ、確認の為きいた。

「いろいろあつて、まだ誰にも告げてないんだ。出来れば家に連絡をしないでくれないか」

どこから話すべきがと迷う。

『……あのうセルファさんこちらの方は?』

帽子の影からそーっと見るのは小人族の3人である。

「紹介がまだだつたね。エステイア。この3人は小人族で左からエル、ミル、カイだ。

昔馴染みの友人なんだよエル。怖い人ではないから大丈夫。そしてエステイアこの仔はシラコキと言ひ」

抱っこしたままのシラコキは、まだ興奮状態なのか離さないよう気につける。

「……こ…小人族!…かつ…可愛い!…」

噂にだけ聞いた小人族である。

小さくつて可愛くつて、愛玩したいと思ひ? 1な亜人種だ。

「これ……ほしい!……セルファちょうどい!」

ハアハアと危ない人になつてゐるエステイアだ。

その変わりようにビクッとなる小人族の3人は、帽子の影に隠れつつ恐る恐る姿を見せては、またビクッとなることを繰り返していた。

エスティアの興奮^{ぶり}にやや引いていた小人族の3人だったが、怖い人じやないとわかつて安心する。

『にーちゃんこの人、大丈夫か?』

主にお頭^{おつむ}のほうは大丈夫なんだろうかと、カイが聞く。

「まあ……女性は可愛いもの好きだしね……」

『じつに危害^{こない}なら、どうでもいいけど』
エルとミルを守るのは、男である自分だと思っているカイだ。

「悪いね。こうも小さいものに反応^{する}とは思わなかつたしな。さてエスティア興奮^{する}のはやめて話を聞いて欲しい。家に連絡^{いれ}ないで欲しいと告げたのは、現在の私は契約^{して}いる精霊^{がい}ないからなんだ」

「えつ……」

ガバッとセルファの右腕を取ると、手の甲を確認する。右だけなく左も同様である。

「銀朱^{ぎんじゆ}に紫紺^{しづか}の印^がな……い……！」

「ああ……蘇芳^{すおう}に代^た緒^{じや}もだ……」

「馬鹿な……ありえない！精霊契約は一生もののはずじゃなかつたのかい！」

「イレギュラーな」ことが起きた。魔道船・ヴァンガード・の事故に巻き込まれた時に

『死に戻り』したようだ。この世界の記憶とは別に、もう一つの人格が今の私にはある。これがどんな結果になるのか予想がつかない状態だ

「『死に戻り』だと……いや……確かに……」

何かを思い出すように、エステイアは自分が知る『死に戻り』のことを思い出す。

エステイアが知る『死に戻り』の関わる記録は、最悪な結果のことばかりだ。

10年前に起きた、大盗賊グランの大虐殺、8年前に起きた魔道師ルネの地方都市

ガナイの消滅まだもつと過去にも大規模な災厄を招いた者たちがいたがきりないほどだ。

これらの事件の首謀者は『死に戻り』であつたことは各ギルド上層部と国の一部の上層部が知るだけだ。

あえて一般には知られていないのだが、『死に戻り』とは今現在の自分とは別の人格が発生することと言わされており、前世の記憶とか別人格が新たに生まれたと思われている。

『死に戻り』に耐え切れない者も多く、大抵は自死を選ぶ。が、
ごくたまにそれに耐え切った者が大規模な災厄を起こすため、
混乱を避けることも考え一般に知れ渡つてはいないのだ。

「なんかね。私の中の人？まあ不思議な感覚なんだが女性だね。聖王と同じ世界の

出身ぽくて普通の主婦で、子供3人生んで孫は5人いたらしいね。
死んだのは89歳

らしい。孫もいて、満足いく死に方だったようだね。スズ・アララ

ギだつてさ。

『死に戻り』で発生した人格は、ランダムでどの世界から来るか知
らないが、

比較的平和だった世界から来たようだし、それほど心配しなくとも
大丈夫じゃない

かと考えているんだけどね』

なんでもないことのようにセルファアは、告げた。

小人族のエルにも心配しなくとも大丈夫だと言う意味も込めて話す。

「……確かに、セルファアの家に連絡はできないな……」

『死に戻り』と発覚した時点で、幽閉されて一生を終わらせることが
は確定してしまうだろう。

「そんなわけで、死んだことにして自由に生きようかと思つたんだ。

』

『そりや…セルファアはアタシといるもの…おばさんは邪魔しないで

…』

落ち着いたらしにシラコキが、セルファに撫でてもらいながらつぶやく。

「「」の躰のなつてない彪はなんなんだ？」

「それなんだが、魔道船・ヴァンガード・の積荷に魔獸があつたか調べることできなか？」

小人族の3人も泣き洩れていたことを話す。

「……密輸されていた可能性があると？」

「多分だね。あと「」のシラコキ。よく見て欲しいんだけど、どの種の彪にみえる？」

「地彪のアルビノではないのか？他の魔獸にもアルビノはいるからな。それにしても「」が達者と言うか地彪らしくないしな…」

しげしげと見るが、エステイアがキライなシラコキはフンとソッポ向く。

「……まさか白齧…彪か？」

よくよく見れば地彪にない特徴が見られる。

『ちよつと……なに…』

ふつふつふつと笑い出すエステイアに引くシラコキ。

「これが白雪彪の幼生体なのかー足の太さみせてくれ。牙の本数は？…」

ああでもない、いりでもないとシラコキのあちこちを触りまくる。

『……セルファ！…助け…モガッ』

口を大きく開けられ、牙の確認までされている。

「エステイアは魔獣フリークだ。まあこれからお世話になるんだし、我慢も必要だよ

シラコキ。そうそうエステイア。これなんの卵か分かるかい？」

水属性じやないかと言つことだけ伝えるセルファは、謎な卵をエスティアに渡す。

「自然の氣を吸つて成長するらしい。それ以外は小人族とは会話出来たみたいだ」

どんな風に会話したとか分からぬが、セルファが知ることを伝える。

「卵状態ではわからんな。うーんオババなら分かるか…んつ…」

卵を転がしたり、光に翳したり、自分の魔獣のステラに見せたりするが、ステラには興味なさそうだ。

「とりあえず、これはオババのほうが詳しいかもしれない。セルファのことは兄が戻つて

からどうするか決めるとして、ここにいるといつ見知った連中に見つかるか

わからないしね、オババの森へ行かないかい？」

「頼む。あと魔獣使いとしての登録できないか確認してほしいんだが…」

バグっている冒険者ギルドカードを渡す。

このカードは、本来なら他ギルドでも使えるカードなのだ。

「これまた凄いバグだね」

「ははは……新しく作った方が良いなら、セルファ・スズ・アララギで作れないかな」

自分の中にいるもう一つの人格、それが異世界から生まれ変わった自分の前世
なのか、それとも『死に戻り』の恩恵で新たに生まれた人格なのか
わからない。

ただ分かるのは、自分の中にいることだけだ。

そしてスズ・アララギの持つ異世界の知識？は、こちらでも使えそううだと思いながら。

エステイアが言つオババの森とは、魔物使いギルドの中にある森と言つよりも、言つよりも、公園と言つた感じの場所だった。

使役される魔物の環境を考慮して、病氣や怪我の治療などをこの公園を使い行つてゐるといつ。

水辺、森、岩場と多岐にわたるエリアに分けてエーブラード王国の各地にこうしたフィールドがあるらしい。

そしてここは森をなるべく再現していることだ。

「へー かなり本格的してるんだな」

魔物ギルドの建物の裏手から、最初は整えられた公園と言つた趣だつたものが、歩いて先へ進めば進むほど森と錯覚してしまつ。

「年に数回だが、ここを訪れた子供が迷子になつて捜索隊が出る程度には広いね」

「どううな

『なんだか懐かしい気がします』

エルがセルファの帽子の上に座つてつぶやく。

愛玩用に浚われて、「うしてゆつくりと、森に入ったのはどれくら
いぶりだろうか。

ミルとカイは、シラコキの背中に乗つてゐる。

「この普通の森との違いは、ある一定の距離で設置している外灯だ
らう。

発光する光る石を利用してゐることだ。

「あれがオババの家だ。眞間は治療院について、それ以外はここで薬
草などの世話してる」

詳しい年齢はわからないが、かなり物知りのことだ。

木造の小さなコテージと言つた家だ。家の前の畠には、種類豊富な
薬草や花、野菜などが植えられている。

「オババ、いるかい？」

エスティアが先に声を出しながら家に入つていく。

「オバ……ヒヤア……」

悲鳴のような声にセルファは何事だと駆けつける。

「ヤメ……ヒヤア……」

「フォツフォツええ乳じや。……んむ。揉んでもう少し大きくすると
ええぞ」

真つ赤になつてゐるエスティアを、後ろから羽交い絞めにする感じで
乳を揉みまくつていた。

「……」

見なかつたことが無難だなとセルファ。
まあエスティアの胸が、揉み応えありそうな大きさなのは確かだが
……。

「いい加減にしろー……このエロババア。密の前でなにしゃがるー！」

「フォツフォツ。ええ乳は揉んでやるもんじゃー……さてのう。お密
さんらしいがこんなババアになんのようかえ」

「初めましてオババさん。エスティアの友人のセルファと言います。
今日は見てもらいたい物があつて、こうして来ました。これが何か
わかりますか？」

氣を取り直してセルファは、何の魔物の卵かわからない。卵を渡す。

「んむうー……卵じやな。水蛇か水竜あたりかもしれんが、まだまだ
孵化せんよ。これはのう。自然の氣が足りておらん。まあこの森にお
いておけばよかろうかのうー」

後数年は、このままではないかとのことらしい。

「へえー。さすがオババ何でも知ってるんだな」

「そうですか。ありがとうござります」

「それはそうと、そこそこいる小ちき子よ。なぜ、森の子があるんじ
や？」

セルフアの帽子の上にいたエルを見て言つ。

森の子、小さき子は小人族をさす。

「主らの仲間なら、この森にもおるぞえ。」

「ええつ！ オババ小人族が、他にもいるのかい？」

なんで教えてくれなかつたんだと、エスティア。

「んむ。おるぞえ。この森は安全じやからのつ。ほいほい小人族のことを話せるわけがないのじやー」

オババ以外の者がいる時は、隠れているのだと言つ。
小人族は、金になる。

浚われ売られてしまつてばかりでは、種族としても滅びてしまつ。こつした安全な場所に置つことも必要なことうしい。

オババが言つには、狩られる対象の愛玩用の魔物もここで保護して
ることらしく、魔獸使いでもなればこの中まで入つてくる者もいなれば、部外
者が立ち寄ることも
ないため盲点をついたとも言えた。

閑話1（前書き）

いつも読んでくれる方、感想くださる方、ありがとうございます。
どうも話がなかなか進まないので閑話入れてみました。

閑話1

閑話1

エブラード王国が所持している精霊憑きの武器は、刀剣類が8種、槍が3種、弓2種である。

これらは特異能力を持つ、聖王が創りし武器で、魔族との戦乱の時に創り出され、現在は聖王と親交の深い貴族に下賜されている。

聖王が持ちし天叢雲剣あめのむらぐものつるぎ

妖刀正宗、雷切、村正、村雨、静御前、萌葱、藤紫

聖王が言つには、覚えやすいか言いやすいで決めたとのことらしいが、異世界風の名の由来は分からぬ。

単に名づけが面倒で、適当につけりやいいでつけた名前なのだが、それは余り知られていなかつたりする。

さて

傭兵王と呼ばれる五大公爵の一人、ルクサス公爵家に下賜された刀は静御前である。

名前の通り刀の精霊静御前は、女性型の精霊であった。

「聖王殿！……一大事でござります……宝具殿に静御前が戻つてき

ております！」

宝具殿を管理する文官の一人が、あたふたと駆け寄る。

「……ルクサスの所だつたな。次代に受け継がれたはずだが……」
さてどうしたものかと、思案する。

「聖王殿……至急、救援をお願いします……大河ムーリルヴァに魔道船
が墜落しました」

慌しいことに、次から次へと問題が発生する。

「静御前は後回しだ。先に魔道船の救助に向かう。手の空いてる連
中は全員救助にあたり、他ギルドへも救助活動の応援を出せ」

聖王の一言により、魔道船の救助を誰もが優先したのだがそれでも
犠牲者の数は多く、助かつた者も少ないと言つ結果にしかならなか
つた。

それが半日前の出来事である。

「ルクサス、静御前が黙して語らぬ

魔道船救助活動を終え、城へと戻つてきたが皆憔悴が隠せない。
余りにも悲惨な現場であった。

水棲の妖獣、魔獣の尋常ではない数とただ無残に喰われていく者たち。

周囲に散らばる物言わぬ犠牲者。

聖王と呼ばれた自分の力でも、大河の水を堰き止めるることは出来な

い。

わずかに助かつた者の救助支援しか出来なかつたのが歯がゆいばかりであつた。

「……聖王よ。孫が死んだと言つことでしょ。静が黙して語らぬ理由は、孫も魔道船に乗つていたからです」

「そりか……」

聖王が創つた武器は、持ち主が死んだと認識すると宝具殿へ戻るよう生体認識の魔方陣がかけられていた。

「我が家に伝わる銀朱に紫紺、蘇芳に代赭さむじやまでも、沈黙したままです。気が早い親戚連中が、是非に継がせて欲しいと名を挙げてますがね……」

「お前も大変だな。家を継ぐ道具としてあるわけではないのだが、そのことに気づかない。精霊の気が済むままにさせておけ。選ぶのは私たちではなく、精霊なのだからな」

「わかりました。大きくなりすぎた家欲しさの連中には、それが見えないようですし」

『……私は……我が主を……守れ……かつた……』

囁く声は、聖王が持つ静御前からだ。

「静、気にするなとは言えん。だが、この先次代へと受け継がれるごとに同じ様なことが起ころるかもしれません。人と精霊では生きる時間が違う。人は先に逝くことを覚えておけ」

「聖王よ。次の次代が決まるまで、静を所持願えますかな」

次代が決まらない今の状態で、静御前を所持するものが次代だと思われて、盜難にあつ可能性もある。

「無論そのつもりだ。文句がある者があれば、私の名をだせ」

「では、しばしの間よろしくお願ひします。次代が決まりましたらまたその時に……」

そして主を「^{あるじ}」くした刀は、しばしの間聖王の下にて留まるのである。

闇話1（後書き）

てな話が王都の方であつたわけです。
おいおいサイドストーリー的に闇話にて考へてゐる話を載せていく
予定です。

結局、その日はオババの家に泊まりこれからのことを見つかるのか話し合つた。

オババが言う小人族は15人ほどの小さな集団で、この家の床下を利用して住んでいることも聞いた。

臆病なのか姿は見なかつたが、小人族の3人とは仲良くなれたとのことだ。

小人族の3人には卵の世話を頼み、ここで一時的だが保護してもらうことで話がついた。

「さて、次はお前さんたちじゃな。魔獣使いになりたいとのことだが、すでに魔獣を手持していることで見習いレベルだのう~」

魔獣使いになるには、特に難しいことではない。

要は自分に使役してくれる、魔獣を手に入れることが一番肝心なことなのだ。

なので、愛玩用の小型の魔獣を持つ者も、魔獣使いには違ひはないのである。

ただし、一般的に魔獣を手に入れると言つことはかなり難しいので

ある。

何が難しいのかと言つと、まず魔獸を自分に懐かせる」とある。
懐かせたい魔獸がいた場合、その個体が幼ければ幼いほど良いのである。

生まれた雛鳥が、刷り込みで初めてみた物を親と勘違いするのと同じと思って貰えればよい。

そうなると幼い魔獸を手に入れる為には、親をどうにかしなければならず、人気の高い魔獸ほど手に入れる為の危険性が大きくなると思って貰えれば分かるだろうか。

そのため専門のハンターもいるほどで、手に入れた幼い魔獸の売買の値段は魔獸のレベルにより変わるので。

「ただし、まだ半年は無理じゃな」

シラユキを見てオババが言つ。

成長しきつていなければ、今すぐ訓練に入るのは難しいとのことだ。訓練と言つても、人との連携を深めることと自分たちの戦うスタイルを確立させるためである。

例えるなら空を飛ぶ魔獸を飼いならす　まず懐かせて　空を飛ぶ訓練をさせ　主人を乗せて飛び、
主人の戦いにあわせて自分で判断させるということを覚えこませるのだ。

必然的に、知能が高い魔獸ほど好まれるのが分かつたと思つ。

「あとは、『死に戻り』のことじゅが、エスティア。お前さんの兄には言わんほうがよ

い。あれは、直情馬鹿なところがある。自分から気づいたら話してしまつていたとなる可能性が高い」

「オババ。ならセルファはどうさせればいいんだい？」

「ばれなければ良いんじゅ。『死に戻り』はまだまだ謎が大きい。國のお偉い連中は、危険視だけでしかみておらん。確かに危険な過去の事件もあつたがのう~」

「ならば、どうしたいかはセルファ次第か」

「そうですね。顔さえればなれば、こちらは問題ないと考えてはいるのですが、上位の貴族連中と家の傭兵たちに見られなければなんとかなるかと考えてはいるのですが、難しいです」

傭兵王と言われているルクサス公爵家は、かなり規模の大きい傭兵部隊を抱えている。

こちらは顔は知らぬが、向こうは知つて居ると言つことはありえるのだ。

「顔を変えるか、隠すしかないじゅうつなあ

「包帯巻くのは、変な病氣持ちと思われるから却下だね。セルファいつそう仮面かなん
かで隠すとか、道化師メイクもあり?」

「道化師は勘弁してほしい。常に人がいるところで道化する必要ありそうだ。どこの国か忘れたが仮面を付ける祭りがあるみたいだな…」

スズ・アララギの持つ記憶に、マスカレードと言つものが出てくる。

完全に顔を隠すタイプから田元だけだったりと、かなりの種類があるらしい。

特殊メイクと言つ葉も出てきたが、しつけは難しそうである。

わざと怪我している風にメイクする」のようだ。

「細工師にも相談できないか?思いついたことがある。後は魔方陣をつまく利用できれば誤魔化せそうなきもする」

「巻き込む人間は、少ないほうが良いんじゃないかい?」

「そつなんだが、協力者が多いにこしたことないのも確かだと思つ「お前さんの持つ異世界の知識なんじやうつへ巧くいけば周囲も巻き込めるなら話してみんか?」

オババはセルファが思いついたことを話してみると言つ。

それは奇妙な話だった。

仮面をつけて普段ではない自分になりきり、祭を楽しむと言つべ

ントが異世界にはあるらしい。

顔が隠れてしまい、誰だかわからない状態をあえて楽しむ仮面舞踏

念とも言ひしき。

「面白いかもしれぬのお～」

この世界での祭りと言えば、豊穣祭か季節の変化を精靈に感謝する祭ぐらいである。

「こここの商人連中を巧く巻き込んで、イベントとして定着させるのも有りかと思つたんだが、出来そうか？」

自分の顔を隠すためだけの思いつきであつたのだが、真新しいことに目がない商人を巧く乗せ、町一つを巻き込んでマスカレード祭りとして定着してしまつたのは、1年後の話である。

異界の魔獣使い1-3（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
どうも話とばしあがかなあ

セルファがムルヴァーラの町へ来て、一月ほど後の話である。

最近巷で起ころる噂話の一つに、ムルヴァーラの町を歩く仮面の人の話があった。

人によつて付けていゝ仮面は違つようで、異様な雰囲気になるらし
い。

特に何かすると言つたことではないのだが、その仮面が奇抜すぎる。
勇気を持つて声をかけてみれば、異様さとは裏腹に一年後にしての町
で行う予定の新し
い祭の下準備と宣伝をかねて、今から少しずつ周囲の人々に宣伝をは
じめたことである。

詳しく知りたければ、商店街の顔役に問い合わせと、警邏する役人
への根回しもして
あるのか不審者として通報されても、役人からも仮面のことを説明
してもらうことに
なり、じわじわとだが、確実にマスカレード祭りが浸透していく。

王都および周辺の町や他国までも、可能であれば一年後開催予定の
祭を、ギルドなどを
介して告知が貼られている。

ただ魔道船の事故から、そう経つていないうちからも何を考えてい

るのだと上からの

抗議があつたのだが、逆にマスカレード祭とは、互いの顔が分から
ない相手との祭を
楽しむ」とと説明し、今回の事故で身内を亡くした方は、特に参加
して欲しいと伝えた。

事故で戻らないのはわかっている。

だがもしも、どこかでまだ生きているのではないかと誰もが望むは
ずで、

マスカレード祭で、沢山の仮面を付けた人のなかに故人がいるかも
しれないと思うだけでも慰めにならないだろうかとの説明をし、故人だけでなく、力
ある精霊は人型を
取れるので、こつそり遊びにきてくれるのを楽しんでもらう為だと
説明したこともあ
つて、一年後の開催する」とは上からひとまずは受理された形とな
つた。

「なんだこりや…」

ある日の冒険者、ギルドに貼られている依頼書みて、ある冒険者が
発した声である。

冒険者、ギルドに貼られている、ランクFの依頼書

依頼主 ムルヴァーラ ライラック通り商店街代表 ロドリック・
ペイン

依頼内容

- ・一年後に開催予定の祭、マスカレード祭の宣伝

- ・支給した仮面を付けてこちらの指定した町にある5店

舗からスタンプを

集めること

- ・仮面はスタンプ集めに必要なため、依頼を受け、終えた報告をするまで

は付けて歩くこと

- ・仮面を付けて歩いているところを聞かれたら、かならず一年後に祭を開

催することを聞いてきた相手に伝えること。説明が難しければライラック

ク通りの商店街だけでも良い。

報酬 5ルーパー

冒険者 P.t 0.5 P.t

期限 その日のうちに

募集人数 一日20人まで

募集期限 祭が開催される前日まで

報酬の受渡し条件 集めたスタンプを押した紙と、貸出した仮面の返却

と、このような内容の依頼書が貼りだされている。

ランクFは町のおつかいレベルである。

報酬の5リーグはだいたい1食分にかかる料金で、報酬は少ないが子供でも出来る内容にしてあるためか、レベルが低かった冒険者や、ちょっとしたラ

ンチ代稼ぎに人気
がでているようだ。

現在の募集人数が後、5人となつていてる。

「募集期限が、祭開催の前日までだろう。一年後らしいから大体3
78日だよな。

毎日欠かさずできたとして1890ルーブで、冒険者Pteが189
Pte」

一日の報酬としてはかなり低いが、長い目で見れば危険がほぼ少な
く安全にこなせる
依頼としてはかなりおいしい。一日の内の1食分が確実に稼げるか
らだ。

いかつい冒険者が、指定の仮面を付けて歩く姿は滑稽で笑いを誘う
が、生活がかかっ
ている冒険者からすれば楽な依頼をこなしつつ、他の依頼も受ける
のにもつてこい
とあって人気がそれなりにある募集となつたようである。

「まずは冒険者ギルドを利用しての宣伝開始。おめでとうございま
す」

セルファアは冒険者が付けて歩く仮面と似た物を自身もつけて、祭の

主催者になつても

らつたロドリック・ペインと会談をする。場所はオババの家のテラスになつてゐた所である。

ちなみにシラコキは側にはいない。

そろそろ魔獣の本性を思い出すよつこと、セルファと別に体に負担のないことから訓

練を開始させてゐるからである。

セルファが一緒に甘えが出るため、別々に訓練することになつたのだ。

「オババ殿から聞いた時は大丈夫なのかと思つたが、本当に成功する祭となるのかね？」

まだ半信半疑なロドリックである。

「大丈夫です。資金のまつは、一通りで用意しましたし、これからこの町の皆さんを

巻き込んでいきましょう」

魔獣ギルドになりたつてゐる町とはいえ、やはりそれなりに稼げるなら稼ぎたいと思

うのが誰もが考へることである。

「祭をするに何が必要で、どの通りを使用し、どうやって開催するか記入したものを

お渡ししますのでよく読んで分からなければ質問をおねがいします

紙に書かれた書類の束をロドリックへ渡すと、セルファは、用意されて

ているお茶を飲む。

ちなみに今付けてゐる仮面は、鼻より上の部分を覆うような感じの

仮面なため、飲んだり食べたりするのには困らない。

要所を中心にざつと読むロドリック。今すぐに自分で決めるのは難しい内容であった。

「良く考えつくるのだな。これならある一定の者だけが稼ぐのではなく、祭に関わった者は稼ぐ気さえあれば稼げるようにしてあるのか」

「はい。ただ、協力してもらえなければそこまでは無理ですね。出来れば、すべてのギルドの方々の協力が必要です」

幸い、魔獣ギルドはオババとエスティアの協力をとりつけている。仮面を作るにあたつての細工師など工芸ギルドの協力も取り付けた。祭に必要なことを考えると、次から次へと行動しなければならない。「わかった。これを必要と思われるギルドへの連絡は、こちらが君と話し合い協力しよう。無事開催するまでようしくたのむ」

青年と握手をするロドリックは、痛ましげな風に青年をみつつ会談を終わらせたのである。

ロドリックが痛ましげに見ていたのは、仮面の隙間からみえる顔半分を覆うようにできた火傷のケロイド痕である。仮面で隠してあるが、火傷痕は隠し切れていはず、火傷痕がなければかな好青年なのだろうと思われたからだ。

まあセルファからすれば、単に付けている仮面の理由に顔に火傷痕があり、素顔を見せたくないようと思わせる為に火傷痕と見える魔方陣を仮面にかけているだけなんだが、理由を知らない者からみれば、顔に傷があると痛ましげに思われ深く見られないと思つてのことである。

「素性を探られないようにするのはこんなものとして、私もそろそろリハビリしますか…」

冒険者ギルドへは、結局新しい名前での登録となつた。セルファの名前をなるべく出さずスズからスーズとして通り名とした。

そのせいがギルドランクが初心者レベルに近いEランクからのやり直しである。本来なら、Gランクからはじめるのだが、エステイアが申請したことでEランクまで引き上げされたらしい。

Eランクの依頼からは、採集関連のものが多くなる。

討伐はあるにはあるのだが、ムルヴァーラの周辺の森や平原だと群れで動く魔獣が中心になるせいか、Eランクの場合討伐系の依頼は何人かでチームを組んで行うことを推奨されていくようだ。

「採集系で良いか」

特に金銭にも困っていないが、比較的同じ生息地にある採集の依頼を2つ受けたことにした。

採集系だと2つまで、討伐系を受ける場合は1つだけと決まっているようだ。

「1000の2つですね。期限は2つとも3日以内にお願いします

魔獣ギルドと違い、冒険者ギルドの受付は、女性も可能らしい。

「わかつたありがとうございます。注意することはないですか？」

「そうですね。採集の場所近くは、毒蜂や咬みつき蜂がいることがありますので、薬を用意した方が良いかもしれません」

咬みつき蜂は、珍しいことに蜂の外見をしていながら針で刺すのではなく、咬みついて麻痺させる魔蟲といったところだろうか。

「わかりました。ありがとうございました」

ランクE 依頼書

依頼主 ムルヴァーラ ムーンスナ通りルミング薬草店 メイア・ルミング

依頼内容

- ・ 麻酔薬用の原材料採集 ムルツキ草 5束
- ・ 滋養回復薬の原材料採集 アウレー草の根 5束

注意事項

- ・ 麻酔薬用のムルツキ草は、ウナツキ草と間違えやすいので注意

してください。かぶれやすいです。

・ どちらも森を中心に生っていると思いますが、魔蟲に注意してください。

報酬

1束10ルーパー

・ こちらの依頼より少なくなつても、多くなつてもかまいませんが、多く採集してしまった場合の買取は各10束までとします。

冒険者P.t 30P.t

期限 3日以内

募集人数 1～3人

募集期限　張り出された日から1週間後まで

報酬の受渡し条件　採集した薬草をルミング薬草店まで、持つてきてください。依頼完

了の書類にサインをいたしますので、それを受け取った後に冒険者

ギルドにて報酬の受け取りをお願いします。

セルファアが受けた依頼内容は、依頼者が女性だからだろうか、わざわざ注意事項まで書き込んでくれていた。

「アウレー草の根は採集用スコップが必要だな」

さすがに、何でも入る道具袋でもスコップなんて入れてない。

足りないと想えるものを、道具屋で揃えてから向かうことに決めた。

冒険者ギルドをでて、周辺を見回せば直ぐに道具屋のある場所が見つかる。

もともと、冒険者が依頼を受けてから即用意可能なように、ギルド周辺に店を集中させているのだろう。

「いらっしゃい、何が必要だい」

威勢のよい店員が、セルファアに聞く。

「薬草採集用の小型スコップと、採集したものを入れる袋をお願いします。大きさは中ですかね」

「はいよ。お客様さんそれマスカレード祭とかつてのに使う仮面だろ。それどこで買えるか知らんかい？ギルド貸出し用とは違うみたいだから」

商店などにこま、すでに情報が回りだしているようだ。

「ロドリック・ペインさんてわかりますか？この祭の主催者なんですが、その人に聞いてもらうか仮面作る工芸ギルドに問い合わせして聞けば良いと思いますよ。通りじとにお揃いの仮面とか作つてもらのも面白そうですね」

- ・採集用小型スコップ 12リーグ
(家庭菜園にも使えるらしい)
- ・採集袋 中 6リーグ

「おおそれは良い案かもしけんな。はいよ2つで18リーグだが、おまけして15リーグだ提案の礼だよ」

威勢の良い店員に礼を言つてスコップと採集袋を道具袋にしまってむ。

薬も用意したほうがいいと言つていたが、いつまでも道具袋の中に各種あるため用意する必要はなかつた。

「武器は、見るか…」

失った精靈憑きの武器とは別に、道具袋に普通の武器も用意してはいたのだが、銘のある武器なので見る人が見れば所持者が誰かばれる可能性があるので使うことは避けたい。

短剣などは銘がないため大丈夫なのだが、やはり武器の所持は必要

だらり。

武器屋はどこかと探せば、道具屋の裏側の通りにあるよつて、最近の武器はどんなものかと確認もかねて見ることにする。

バルゼク武器店 人かそこそこ入店しているよつて、それなりの店らしげ。

壁にかけられている大型の武器（鑑賞用か？と思つ大きさである）
ビリヤリの店は剣を中心とした武器屋なよつて、投擲用の小剣から大剣が主流のよつだ。

「はいよ次へ……」

店員さんに肩をポンと叩かれ、何が次なんだろうと疑問がわく。

「あれ、お客様依頼を受けた人じゃなさやつだね。仮面つけてたからてつきり依頼を受けた人かとおもつたよ」

ビリヤリの店は、マスカレード祭を宣伝するためのスタンプを押す店の一つだつたらしい。

「ああ。そつだつたんですか。何かと思いましたよ。ブロードソードが欲しいのですが……」

「悪いが手見せてもらえるか？」

どれだけ使えるのか、手をみてから判断しているよつだ。

「悪くはないな……いや……」れは「

なにやアブシブシと齒こては考え込んでこる。

「武器は、主流のものならほぼ使えますが」

「のようだな。本来は刀じゃねえのか？握った時のクセとかがそんな風に見えるんだが……」

「ええっ。失くしてしまったので……」

「刀はあるにはあるんだが、値段がここにある武器と一桁違うが買えるかにーちゃん？」

刀の技法は、本来この世界の物ではなかつた。異世界からの技術なため、作れる者は多くないらしい。手入れや修理などはここでも受け取りは可能で専門の刀を扱う所に頼むらしい。

「価格によりますとしかいえないですね」

「まあ 見るだけみてみるかい？ おい いの 番頼む奥に行つてくの」

近くにいた店員に声をかけ、セルファに奥へ一緒に来いと合図する。

「奥にも武器あるんですか？」

「ああ。表のは一般的な武器だけだ。それなりの使えそうな相手には、奥を見てもらつている」

冒險者などの実力を見てから売っている店らしい。かなり玄人と言つたところだ。

「……」
「……」

1桁違うと言うだけの種類の武器が置かれている。精靈憑きの武器ほどではないが、銘なしにもかかわらず思つていた以上の出来である。

「どれもすばらしい物ですね」

刀といつても種類がいくつある。太刀、忍者刀、野太刀、小太刀、長巻、短刀、脇差 etc etc
ここにはそれらの半分近い量が置かれているのである。

「お、さう言って貰えりや作つた奴も喜ぶな」

「その方は？」

「もう随分前に、寿命で死んだ。なんでも異世界の刀鍛冶師つて話だが、

ありやどうみて生粹のエブラード人だぜ。
法螺話にしちやあ、良い刀作るじーさんだつたがね」

セルファから見れば、その人も『死に戻り』した者としか思えない。既に、死んでしまつてゐるので確認出来ないのが残念だが。

武器屋の店員こと店主だつたらしい。名をガンク・バルゼクとのことだ。

「ガンクさん。その方が作つた武器、すべてください」

「ふつー…」にーちゃん[冗談はなしだぜ]

通常一般的な剣の価格は、初心者用で最低でも5000ルートである。

柄1つ違うと言われる刀だと初心者向けかは微妙だが、50000ルートと考へると
刀だけでもすべて買うと「う」とは、とんでもない金額になる。

「ガソクさん。ルートでの用意だと直ぐは難しいので、これじゃダメですか？」

道具袋から取り出したのは、最初から何があった時の為と自分が用意しておいた予備資金の一部であり、道具袋に入れておいたものだ。そのため宝石の所有権は大丈夫であった。

「宝石じゃ無理ですか？」

取り出した宝石は4つ。赤、青、黄、紫で指の第一関節ほどの長さがある。

宝石で鉱物と思うのだが、以前狩った魔獣の心臓が変化したものなので、詳しくはわからない。

「にーちゃん。おめえ何者だ」

「通りがかりの冒険者ですが」

「つじやなくて、と頭をガシガシとかく。

「にーちゃん見ると自分の常識が、馬鹿みたいに思えるぞ」

「で、売つてくれますか？」

「よし売つた！これならおつりも十分だしな。
れば、何本か持つていって良いぞ」

どうでえ太つ腹だらうと告げる。

「取引成立ですね。では選ばせてもらいますよ」

購入した刀類は、よけるように移動させてもらうと、セルファは他にも使えそうな武器を吟味していく。

自分の好みが刀だつたせいか、他の武器はまあまあな出来かと。使
いまわしがきき、予備武器として使える剣と小剣、槍、弓で計6本
もらうこととした。ついでに矢も1000本ほどもらつ。

「おつか。んでどうする配達はできるが？」

見れば、そこそこの武器の山が出来て いる。

「大丈夫ですよ。」このだけの秘密ということで、見たことは他言しないでください」

近くにあつた武器からセルファは、道具袋に入していく。物理法則無視である。

「にーちゃん。それは…」

聞いたことはある。

何でも入れられる道具袋と言つものがあつて、極一部の人間が所持していると…

それがあれば、重い思いをして荷物を運ぶ必要がないらしいとだ。

「秘密ですよ。ijiだけの事です」

良い買い物をしたなあとセルファ。

買った刀の中から一本を選び脇に差す。

「ああわかつたぜ。またなんかあればきな。修理はこつちに持つてきてくれれば、請け負うからな」

「わかりました。またきます。後、私を探したい時は魔獣ギルドに問い合わせればわかりますから
オババさんの所にいるんで」

「おうよ

ガンクは嬉しそうに出て行くセルファをみながら、ややげつそりとする。

あんな馬鹿みたいな大人買いで、武器を買つて行くやつを初めてみたのだ。

しかも4種の宝石でだ。極上品な石なのはすぐにわかつた。

「はあ～これ売つて、新しく武器、仕入れるかね」

赤い石を手にとつて、かざすように見るガンク…

「……まつ…まさかな…」

ありえない！ありえない！と否定をしたい自分がそこにいた。

宝石は宝石でも、魔獸石ではないか！

魔獸から宝石は取れるのだが確率が低く、買って手に入れようとしたら場合小さな小国一つくらいは買える値段である。

しかも魔獸石は、魔道具を作る素材に使用できるのだ。

普通の鉱物の宝石では、装飾品にしか使えないのだが、魔獸から取れる魔獸石は別である。

魔道師が欲しがるので、大きな石であればあるほど値段が半端なくなるのである。

「あの二十九さん一体、何者だ…」

咳く声を聞く者は、誰も居ない。

ただ、ガソクはこの石を持つていて「これを誰にも言えない」と呟つた。

売る先は、よほど信用出来る所でない限り自分の身が危険だと思つのであった。

バルゼク武器屋で武器を手に入れてから、ホクホクとセルファは採集に向かうため一番近い東門を使う。

行きかう馬車と、冒険者の集団をみながらセルファの中の人スズが、不思議そうにしている感じがした。

なんでも、馬車とか言つた乗り物は、観光地にあるくらいで車と言うものが主流であり、

他にも色んな乗り物のイメージを伝えてくるのだが、不可思議な形すぎてセルファにはわからない。

鋼鉄製の蛇やら、変な形の鳥もどき。それらに人が乗り移動するらしい。

こつちで言う魔道船のようなものとのことだ。

スズが居た世界では、それらを使って当たり前に人が生活していたらしい。

驚くことに、種族は人族のみ魔獣はおらず、野生動物や家畜などこつちの世界と比べるとかなり平和な世界だと思った。

それでもスズが言つには、他の国と戦争をしていた時もあり、こつちと比べればとんでもない規模の兵器を使用していたとのことだ。ただしスズにはその知識はないので、兵器の作り方などは分からないらしい。

さて採集の薬草は、町からそう離れていない森にも自生しているものだからか、1時間もかかりずに依頼数分の採集はおえたのだが、

中々帰れないでいたセルファアだった。

森に入った途端スズが、あれを採集しろ、これもだとセルファアからすれば雑草を集めると言われまくった。

なんでも、山菜で下処理すればチキンと食べれるものとのことで、スズの世界とこっちでは、植生は似たようなものらしく、見た目が同じだけの違うものではないかと、伝えてみたのだが草のにおいも同じとのことだ。

こっちからすれば半信半疑だが、スズが言つには絶対に山菜とのことで何種類か採集をした。

「奥に来すぎたか…」

町の方向はわかっているので、迷つよつなことはないが索敵を使い危険がないか確認をする。

自分がいる周辺は、問題はないが索敵になにかが引っかかる。

「数は5、追われているのは2…」

旅の者が、冒険者が分からぬが何かに追われているふうである。

面倒に巻き込まれるのは御免なのだが、スズが助けると騒いでいる人として、困っている人を助けるのが当たり前のことだ。スズは、なんとも平和すぎる世界からきたものだと思つ。

「…クツ……大丈夫かリファ！」

「「」めん……」れ以上は無理…」

森の中を走るのは、男女一人の冒険者だった。男が、女を抱えるように走っている。

逃げているのは、咬みつき蜂からであった。

「足手まといだから、置いて逃げて…リック」

リファと呼ばれた少女は、既に2回咬みつかれているのか、麻痺状態が酷い。

「『主人様は、俺だ！自分の女捨てていく馬鹿じゃねえぞ！』

簡単な薬草採集のはずだったのだ。咬みつき蜂」ときで、連れを置いてく気などこれっぽっちもない。

「よく言つた少年」

ポカンとしている一人にセルファは、麻痺薬と回復薬の小瓶を投げ渡す。

おかしな仮面を付けた男が、助けに入ってくれたらしい？

呆然としつつもリファに薬を飲ませる。

「「」で待つてろよな。援護してくれる」

咬みつき蜂に向かっていった仮面の男？を追う。

応戦しているのが、索敵で分かつたが、咬みつき蜂と思われる数が3に減っている。

「早い…」

咬みつき蜂は、大きさにして30センチほどなのだが、動きが早く倒すとなると追い込むかしないと難しい。

低レベルの冒険者では、1匹だけならまだしも数匹となると、なかなか倒すのが難しいため見かけたら即逃げろが鉄則であった。

追いついたリックと呼ばれた少年は、腹に投擲用短剣を受け地面に落ちて這っている咬みつき蜂に気がつく。

飛ぼうにもその背中の羽は切り落とされており、飛べないよつだ。シャーと、威嚇してくる咬みつき蜂の頭部に剣を刺し、致命傷を与えた。

見れば同じような状態の咬みつき蜂が2匹這いいずつており、剣で次々と刺していく。

「おこーーー！」

援護と言つよりも、後始末をせらわれているよつな感じである。

「うひちだ少年。悪いが投擲用短剣の回収を頼む」

言われたように短剣の回収後、声がした方に向かう。

「あんた…何してんだよ…」

「見ての通り。羽の回収だ」

「はあ……」

咬みつき蜂の羽なんて、採集の材料にもならな~~こ~~^いである。
そんなもののどうするんだと思~~い~~^うコックだ。

「短剣返すぞ。俺はリックってんだ。採集していったら、これに襲わ
れたりリファと逃げていたとこだ」

「私は、スーズだ。少女の所に戻つてやつたらどうだ?」
「うちは大
丈夫だしな」

「とつあえず。礼は言つとく」

「ああ。運が良かつたなリック。次からは、近場でも薬を用意して
おくれ」とだ

言られて、やや赤くなる。

近場だから大丈夫だと過信したのが、リファがああなつた原因であ
つた。

「簡単な名乗りしかしてなかつたから、改めて言わせてくれ。リック・ルブオーってんだ俺は。んでこっちがリファス・レシア。」

「セルファ・スズ・アララギだ。スーズと呼んでくれればいい」

「こっちもリックとリファでいいよな」

「そうだね。本当に助かりました。スーズさんいなきや私たち死んでた」

たまたま運が良かつた。

次もこうなるか分からぬが、生きていて良かつたと想つリファだ。ムーンスナ通りを歩いていると、薬草を煮た匂いがそこかしこと漂つてくる。

この通りは、薬草店が多い通りのようだ。

「同じ依頼受けてたのかよ……」

あの後、話を聞けばアウレー草の根の依頼の方を受けていたリックが言つ。

「リック！助けて貰つて文句言わないの！」

今はすっかり、麻痺が治つて隣を歩くリファだが、回復薬を飲んだ

からといつて直ぐに

咬まれた傷が治るわけでもないせいか、まだまだ痛そうに時折顔をしかめる。

「まつたぐ、一時はどうなるかと思つたけどなんとかなつてよかつたわ。スーズさんありがとうございました」

「たまたま運が良かつただけだ。今回は運があつたが、次からは注意事項も良くみて考えることだね」

「そういえばスーズこと、セルファは経験不足ゆえの無知での死亡者が一番多かつたなと思つ。」

「なあ…。たまに見かけるあんたもだけどさ。変な仮面の連中なんなんだ? あとなんで咬みつき蜂生かしていたんだ?」

冒険者ギルドに張り出されている依頼を知らないのか、リックが聞く。

「仮面は、一年後に予定しているマスカレード祭の宣伝だ。報酬はランチ1食分程度だが、募集期間が長いせいか、人気がある。私は違うがね。蜂は、死んでから羽を採集すると、羽が濁つた色になるからだ。」

蜂の羽の使用用途はわからなかつたが、仮面の隙間から見えるケロイド痕から、顔を隠すためだろうと推測するリファだ。

リックはそこまで気づいていないみたいねと思いながら…。

ルミング薬草店には、ハーブや乾燥途中の薬草が吊るされていた。店の外観が、薬草店と言うよりも花屋っぽいが、扱うものはすべて

薬効効果のある植物だろつ。

「こりつしゃいませへ。今日はどつ言つたじ用でしょうか？」

この店の主人だろつか？薬草の仕分け作業をする女性が言つ。

「冒険者、ギルドの依頼確認お願ひします。私は後で良い」

「じゃあ先に終わらせますね。アウレー草の根の買取お願ひします。数は7束なのがいいですか？」

丁重に取り出した根つこの束を渡す。

「確かに確認しました。こちらにサインしておきましたので、これをギルドに持つていけば報酬ももらえます。あら、怪我してるみたいだけど大丈夫？」

血が滲んだ衣類に気づいたのだろう。

「ええ。大丈夫です。処置してあるので……」

注意事項をよく読まずにいたから、とはとても言えない。

「なら良いけど、気をつけてね。たまに冒険者でも簡単な採集依頼受けて、亡くなる人もいるみたいだから」

「はい。ありがとつござります。」

「んじゃ俺たちがギルド行くわ、今日は助かった。」

「ああ。次は準備しておくことだ……リック後で話がある。ギルドの喫茶で待っていてくれ」

「……わかった。また後で……」

二人を見送るセルファアは、店主に依頼の薬草をわたした。

「お待たせしました。ムルツキ草とアウレー草の根ですね。先ほどの方と一緒にだつたのですか?」

「あの二人とは、途中で合流してね」

「そうでしたか。ありがとうございます。あなたが、助けてあげたようですね」

薬草の数をかぞえ、必要書類に記入する。

「なんのことでしょう?」

「とぼけなくとも分かりますわ。たまにいるんですよね。不慣れなのに、準備不足の冒険者が怪我をする。この仕事長い私ですが、依頼途中で亡くなる方も何人かいましたわ」

危険はあるが、それ以上に儲けも大きいからか冒険者になる若者は多いが、死ぬ者もまた多い。

「最初の危険を乗り越えた方は大丈夫なのですが、たまに亡くなる方を見ると考えさせられるのです。依頼を出してよかつたのだろうかつて」

自分で採りに行くのはむずかしい。出来る者に依頼するのが普通なのだ。

「そうでしたか。その結果を選んだのは本人としかいえないですね
『ありがとうございます。ではこちら、ギルドへ提出してください。薬草は聞
違いなくすべて受け取りました』

「ありがとうございます。ではまた」

薬草店の店主に見送られ店を出る。

「…追われていたのは、リックたちか

何をしたのか、または何から逃げているのか知らないが、セルファ
がリックに後でまたと告げたのは、森をでて、町に入った辺りから
後を追う気配に気づいたからだ。

自分を追う者なのか、リックたちか分からなかつたため、ああ言つ
たのである。

後をつけていた者の気配はない、自分ではなくリックたちに用があ
るのだろう。

「また面倒なことになるかね…」

『死に戻り』してから碌なことに巻き込まれる体质にでもなつたの
かと、思いながら冒険者ギルドへ向かった。

冒険者ギルドは魔獣使いギルドと違つて、じへ普通の建物を利用している。

それでも、中は冒険者たちが使う施設などかなり充実していた。

1階は主に受付となつており、新規登録と依頼受付に、報酬の受渡し、荷物の預かり所

地下はほぼ24時間営業の食堂であり、

2階は喫茶店、診療室、簡易図書室、談話室

3階から上は宿泊施設となつていて、宿泊料金は1日100ルーブル。

ムルヴァーラの平均的な建物は5階と言つても考えると、この世界の文明レベルはそこそこ高いのかもしれない。

「確かに受取りました。報酬の100ルーブルとギルドガードに追加したPtの確認をお願いします」

Ptは、ちゃんと追加されている。この、どのギルドでも使える共通カードはなかなか面白い。

「確かに、ではまた」

「ありがとうございました」

セルファアは待ち合わせの喫茶店に向かう。

食事や酒を飲みたければ地下なのだが、ただお茶をしたい場合や待ち合わせをする場合だと喫茶店か談話室と言つたところだらうか。

「いらっしゃいませ～一名様ですか？」

「いや先に連れが来ている……」

「スーズこつちだ……」

窓際のバルコニー席より、リックの声がかかる。

「居たよつだ。彼らと同じテーブルで、飲み物はここのお勧めで頼む

「待たせたかな」

「いいえ。でもどうしたんですか？」

リファはてつくり薬草店で、別れそれきりになるかなと思つていたのだ。

普通、冒険者はチームを組まないかぎり一緒に行動することは余りない。

「……

店員が、お勧めだといつ。ハーブを使ったお茶セツトを置いて行くのを待つ。

「……時は……なる……空間を……遮断……」

セルファは、空間を一時的に遮断する詠唱を唱える。

「なつ……」

「さてこれで邪魔は入らない。」この空間の外からは、普通にお茶をしているようにしか見えないはずだ

周囲に声も漏れることもないが……

「おまえ追つ手か……」

剣に手をかけるリック。

「座れ。その場合だと森で助けた理由にならない」

「ダメよリック！」

「ここで待ち合わせしたのは、追われているのがそっちだと分かったからだ」

「本当に追つ手じゃないんだな！」

嘘なら切ると、剣先を向ける。

「私が、何故追わねばならない？理由も知らずにどうじるど？この店に入った時点で一人連れの男がこっちを伺っていたぞ」

喫茶店内は、それほど混んではいなかつたのだが、リックたちを伺つてゐる様子なのは確かだつた。

「あいつら、しつこいわね」

「で、追われる理由は？話したくないならどうでもいいが…意外といけるなこのお茶は」

お勧めと言われたハーブ茶の色が、毒々しい赤色だった。ハイビスカスみたいとスズが言っているが、そのハイビスカスが何かわからない。

「スーズさん話したら助けてくれますか？」

「内容による…」

「まあ そうですね。話聞いたら巻き込まれる覚悟してくださいね。冒険者になる前のことで…」

リファとワックは、もともと幼馴染だと囁く。

Hブロード王国の、西よりのはじっこにあるタリムと呼ばれる小さな村の出身だ。

タリムの村の納税の時に領主様が、何の気まぐれか村に来てリファを見初めたのが原因とのことだ。

「あんなのが領主なもんか！行儀見習いだと領主の館に行つた娘は、孕ませれて殺されるか良くて奴隸として売り扱われる…」

リックが囁くには、近隣の村から見目の良い娘をそつやつて集め好きな勝手してることである。

殺されるは、連れてかれた娘の半が自死を選んでしまうからとのことだ。

戻つてこない娘もいつの間にか消えてしまつてこる」とから、奴隸として売られているのではとのことである。

予告なしに領主がきてしまつた為、リファアが見つかってしまつたらしい。

「私がいると、村に迷惑かけると思つて行いつとしたんですが、村の皆が逃げろつて言つてくれて…」

どうすれば良いのか色々と考えたのだと言つ。

通常領民は、領地の移動は「冠婚葬祭」くらいしかない。その場合は特に許可も何も必要しない。

「領民と言つても、冒険者になれることがわかつたので、冒険者になれば移動の自由が保障されるのでリックが機転がせて、二人でなんとか逃げ出して冒険者になりました。」

それが半年ほど前の」とうし。

「西のタリム村…領主の名前は？」

「チヨリム伯爵です。なんでも王都の偉い公爵様と、親しいんだとか言つて無理矢理連れて行かれた人もいるみたいです」

その辺の真偽はわからないが、周辺の村では女性は隠されるかしてはいたがどうにもならない状態のことだ。

「チュリム伯爵は、そのよつな」とをする者とは噂にもないはずだが……」

確か魔獣の家畜化に、意欲的な人物だったはずである。

チュリム伯爵の領地は、エブラーード王国西側の高原地帯にありそれを利用して羊毛産業を発展させるべく、実験を繰り返し行っていたはずだ。

元々は、魔獣の中でも比較的おとなしい種を掛け合わせを繰り返し、家畜化させることに成功させた労働者として知られている程度なのだが、現在は数は少ないが王都などに羊毛や毛糸、羊肉の流通をさせていたはずである。

「んな」と言つても、チュリム伯爵の息子が連れていつてるんだが

なんでも雇つた冒険者ぐずれか、傭兵のよつな者を引き連れているらしい。

「村は、羊毛産業をしているのか？」

「ああ。始めたころは、チュリム伯爵もよく顔だしたつて聞いたけどよ。10年も昔だぜ」

今は姿もみせず、息子が代理だと叫ぶ。

10年前までは、本人の姿を見たと言つたのだが、気づけば王都から呼び寄せたと言つ息子に代替わりして現在の状況が出来上がつていたらしい。

「リック。今日はビックに宿をとつていろ?」

手で上を指すしぐさをする。

「ビックの一人部屋をとつてゐる。ビックなら安いし、冒険者ギルドで襲う馬鹿はいないだろ?」

「確かにそうかもしぬないが、部屋を引き払つて私についてくれないか?」

「ビックへ行くんですか?」

リファアが聞いてくる。

「チヨリム伯爵は、元々魔獣の家畜化でビックの魔獣使いギルドと繋がりを持っているはずだ。そうなると魔獣使いギルドの方が、チヨリム伯爵に詳しいかもしぬない」

「どうも何かを見落としているような気がして、それなら知つていうな人物を探して聞いた方が早いのではと考えたのだ。」

「でもよ、追つ手いるんだろ?」

「追つてこようが、なんとかなるはずだ。半年も逃げ切つていたん

だ。今更じゃないか？」

追う理由は、リファを手に入れることか、二人の排除ではないだろうか。

まだどちらか分からぬが、動くなら早いほうが良いはずだ。

「遮断を解除する。冒険者ギルドの1階で待っているから、ここを引き払ってくれ」

二人がうなずくのを確認してから、遮断の解除をした。

店内では、こちらを伺っている様子の男連れに注意しつつも、一体何が起きているのかと思うのであつた。

「なあ……ここって魔獣使い以外が入つてもいいのか？」

ポカーンと見上げた先には、空を飛ぶ優美な魔獣が発着陸している。飛行系の魔獣は、町の上空を飛ぶのはかまわないのだが、必ず発着陸はこのギルドからと言つ規則がある。

違反した場合は、現金での罰則となるようだ。

「す」「いねえ~」

この町に来てから魔獣使いの姿を見るが、魔獣使いギルドがこれほど大きい施設だと思つていなかつたらしい。

「用があれば良いんじゃないのか?」

ギルドに依頼をしにくる一般人もいるだろつ。確かにこの広さは、初めてだと驚きも大きいかも知れない。

「すつづ~。龍に彪に…」

かなり近くで見える姿に興奮しているようだ。魔獣は男のロマンだそうだ…。

『…セファ~』

タツタツタツと駆け寄つて来たのはシラコキであつた。

調獣士をほつぼりだし、訓練場への移動途中にセファの姿を見かけて駆け寄つてきたようだ。

微笑ましいことに、一緒に訓練する予定の魔獣の仔を引き連れていた。

「調子はどうですかシラコキ?」

『訓練…つまんない』

もつと撫でると、セファに擦り寄る。

「ここへ来た頃とくらべると、成獣並の大きさになつた。

まだまだ甘えん坊ではあるが、地彪よりもやや大きくなりそうである。

引き連れてきた地彪の仔たちは、おとなしくすわっていた。
どいつもシラコキを女王様扱いしているようだ。

「「ひつ彪ー！」」

囮まれてしまつ形になるせいが、一人はやや青ざめて動けなくなつてこるようだ。

「怯えなくとも、彪は襲つてこない」

『誰…？』

フンフンと、匂いをかいでいる。

「知り合いだ。シラコキこそ訓練はどひだ？調獣士を困らせて、いるようだな」

苦笑しながら近づいてくる調獣士に会釈する。

「お戻りでしたか。シラコキが走り出したのには焦りましたよ

「これは我がままでしよう？厳しくしてかまいませんよ」

『む～…アタシがんばってるよー。』

誉めてよど、擦り寄る。かなりの甘つたのだ。

「いえいえ、シラコキが来てからのが楽ですね。他の彪がこの通りですか？」

7頭ほどの地彪の仔は、ほぼシラコキと同じ大きさだが違のはシラコキをリーダーと思つてゐることらしい。

本来、彪は子育ての時にしか群れにならない。

リーダーを決め、それに呑ませることはそうそうないはずなのだが、シラコキには無条件で従つようだ。

「シラコキは群れのリーダーなのか？」

『違つて。アタシの邪魔するから呑きのめしたら、こいつなつただけあつたらしい。』

当初は、シラコキの方が小さかつたせいか、イジメもじきなことがあつたらしい。

「彪は、無条件に強いと思つた者に従います。シラコキは特別ですから、なおむりですね」

調査士は、彪の習性などから考へても、地彪の仔がシラコキの方が上と認めた結果だからとのことだ。

「そうでしたか。では、シラコキ訓練に戻りなさい」

『アタシ……セフアといたい』

「訓練が終わつたらいられるぞ……」

何をどう言つてもこれ以上はかまつもらえないと知つていのせいか、我慢することにしたようだ。

『待たせてしまつたようですまない。どうした?』

地蔵に囲まれて、固まつたままの一人。

流石にかわいそうだと、調獸士が呼び笛を使つ連れて行つてくれた。

「はははは…」

緊張のあまりへたり込む。

「怖かつた…」

まあこれが普通の反応だうなと想つのだ。

「ここでは魔獸と、今みたいに遭遇する」とがいい。こちこち反応してたらきりない

「そりやスーズは慣れてるかもだけよ」

「魔獸つてしゃべるんですね…」

一人とも触れるほど近くで初めてみた魔獸が、居なくなりホッとしたようだ。

まず最初にすることは、チュリム伯爵を知る人物がいると思われる畜産科を探すことである。

「君、すまないが畜産用に研究されている魔獣に関する場合は、誰に相談すればよいんだ？」

「じ」の受付で良いのかわからず、総合窓口案内に聞く。

「畜産用となると、畜産科のウォルフナー先生の研究所になります。畜産科は、別棟になりますので、この建物をでて左にある建物へ行ってください。そこで大体の実習などが行われているはずなので、詳しい質問はそちらで聞いた方が早いです」

「わかった。ありがとう」

「どうしてですか？チュリム伯爵のこと、畜産用の魔獣って関係するんですか？」

チュリム伯爵の、現状を訴えたのが何故いつも話がずれていくのかわからぬリファである。

「チュリム伯爵が、畜産用の魔獣に精通していたのなら、ここにも知り合いがいるはずだからだ」

「 「？」」

スーズが「？」との意味が、まったくわからないリックとリファであつた。

畜産科の厩舎は、かなり獨特な獸臭さがあり、何種類かわからないが食肉用、生乳用、獸毛を利用する魔獸が研究されている。

「なんか変な顔だな」

リックは柵の向こうに見える魔獸を見て呟つ。

「メルファーとピグリスの外見を持ち合わせているように見えるが…」

顔がメルファーで体毛の柄がピグリス。

メルファーはイノシシで、ピグリスは柄のある豚と思つていただけば良いだらうか。

どちらも食肉できる魔獸だ。

どうやらここは魔獸のなかでも、食肉に向いた獸を交配させている場所のようである。

「あそこには誰かいりますね、私聞いてきます」

リファは数人の実習生らしき者がいるまつべ、走つていぐ。

「ウォルフナー先生みつけましたよ~」

リファの横に立つ杖をついた年配の男性が、探していたウォルフナ
ー先生らしい。

「君たちは……？」話もなんだからワシの部屋へ来てくれたまえ」

側にいる実習生に、しておくことを指示すると部屋へと案内する。

「さて散らかつているが、適当に座つてくれ」

ウォルフナーの研究室は、来客用のソファがある場所以外は、全て
畜産用の書物など所狭しと散らかり放題である。

「ワシに何の用かね？冒険者に見えるが？」

杖を傍らに置いて、向かい側のソファに座る。

「はじめまして。私はスーズとります。こちらの一人は、タリム
村からきた冒険者のリファとリックです。魔獣の畜産改良で、チュー
リム伯爵と言う方がいるのですがご存知ありませんか？」

「知つとる。古い友人の一人じゃな。向こうは20ほどワシより年
下だが、それなりの評価はされるばずじやな。ここに最近は便りが
ないが、あれは研究馬鹿などこのがあるから改良にのめり込んでも
るんじやううな」

確かに10年ほど前までは、そうなのだがその後を知りたいのだ。

「チヨリム伯爵ですが、代替わりして息子さんが領地を治めている
そうです。二〇〇〇年ほど本人の姿は見えないようですが、」

「はい……？ 今なんと言つた？」

「息子さんが……」

「チヨリムに息子などおらぬぞ。研究馬鹿が講じて、結婚もしてい
ないはずじや。養子の話もまったく聞いたこともない」

「じゃあ、あれは誰だよー近隣の村から若い娘浚つたり、したい放
題やつてんだぞー！」

リックは、浚われた娘たちの現状などをこと細かくウォルフナーに
話す。

「妙じやの？ 4年前にチヨリムの名で、論文が発表されてゐる。
見た限りでは、本人の筆跡であった」

となると4年前までは、確實に生きていたことだらうか？

「気になるようであれば、貴族院へ問い合わせしてみればどうじや
？ あそこは婚姻や養子の記録が残されておるはずじや」

ウォルフナーからは、それ以上の成果は得られなかつたがチヨリム
伯爵の息子？ と詰つ新たな謎が出てきたのであつた。

チュリム伯爵とは、元々この魔獣使いギルドで知り合つたのが、今からだいたい40年ほど前のことらしい。

当時のウォルフナーは、二十代の駆け出し魔獣使いを目指していたのだが、自分の適性では魔獣使いになることは難しく、かと言つて魔獣使いには未練があつたせいもあり色々ここでしているうちに、今の魔獣の畜産用への改良に落ち着いたとのことだった。

当時のチュリム伯爵は、一言で言つなら魔獣馬鹿。魔獣好きと言つてしまえばそれまでなのだが、知識面でもかなり意欲的な人物だったらしい。

ただその当時から既に両親は亡く、後見していた爺さんがいたらしいのだが、その人も年齢的にみれば既に鬼籍だろう。昔から身内に縁がなく、魔獣にのめり込むことで寂しさを紛らわせていたのではないかとのことである。

どちらが、より優れた魔獣を生み出せる、もしくは家畜化できるのかお互いに深夜まで談笑していた頃が懐かしいとのことだ。

5年ほどここで、色々な研究をしていたのだが領地経営をしなくてはならないためその後は自分の領地へ戻り、領地の風土を考え組み合わせた完成させた魔獣の羊毛や肉などの改良に成功して今にいたるのだが、10年前になにかあったのだろうか。

「とりあえず、チヨリム伯爵の系図確認からした方がよさそうですね。息子と言う人物が系図にいるのかの確認と、リックとリファは冒険者ギルドへ行き、チヨリム伯爵領の周辺の村の情報を知る冒険者がいないか探してください。基本的には一人で行動すること、人通りのない道などはなるべく使わないよう行動してください。連中、リファを今だ付狙つてているようですから」

「ワシが知るチヨリムなら、人を浚うようなことはさせんはずじゃが、いかんせ会わないでいた年月を考えると、わからんしのう」

もつとこまめに連絡を取り合つべきだつたかと思つたが、お互に研究馬鹿なところがあつたので過ぎてしまつたことを後悔しても仕方がない。

「ウォルフナーさんは、手紙の用意お願いできますか？普通に元氣でしているかとかの近状を知らせるもので構いませんので」

その手紙を利用して、チヨリム伯爵と面会をする足がかりとするこにして、それまでに調べられることは調べてしまつつもりだ。

「ワシは構わんよ。そこの嬢ちゃんが狙われているなら、いいものがあるが使ってみんか？データを定期的にこしててくれるなら貸出しではなく譲るのもありだが」

「「「いいものですか？」」」

「みてのお楽しみじや。こちとしてはデータ取つてくれる人物探しであつたので協力してくれんか？」

謝礼はそのいいものでも良いとのことだつた。

ウォルフナーはテーブルの上に置いてあつたベルを鳴らす。

「お呼びでしょうか教授」

来たのは助手の男性だった。

呼ばれるタイミングを待つっていたのか、手にはお茶を持っている。

「失礼します。遅くなりましたが、お茶をどうぞ。ここで改良している物なので感想くださいます」

「すまんのう。お客様に先に茶を出すべきじゃつたな。Hシリーズを隣の修練室へ連れてきてくれんか? 被験者に合わせて様子みといんじやが」

連れてと、言つことは生き物? と考えるセルファだが、それが一人の助けになるなら利用するべきかと考えた。

「なんだろうないいものつて?」

「???? わからぬ。あつコレ美味しいですね。ミルクにお茶混ぜてるのかな?」

「もう少しをお茶の味が濃くても良むわづです。」

「まだまだ改良の余地はありそつじやが、こんなものかのう

ミルクに茶葉を混ぜて少し煮込んでみたから、砂糖を入れたものらしい。

「好みで何か香辛料も混ぜたら面白うです」

前世か憑依かわからないが、異界人であつたスズの記憶を持つセファは、シナモンと言うスパイスがあることでそう呟く。
ただこの世界で、シナモンにあたる香辛料が存在しているのかは知らない。

スズが言うシナモンが、この世界にあるのかスズの世界のシナモンを知らないセファにはどうしようもないのだ。

「ほう。香辛料か面白そうじゃな。色々調べさせるかのう」

コンコンとノック後、扉が開く。

「教授、用意できました」

助手の青年が、呼びにきたようだ。

「よし、ではこちらにきてくれんか。騒がなければ、何もしないはずじゃ」

ウォルフナーについて修練室へと案内される。

「これがHシリーズと呼ばれる魔犬じゃ」

そこに居たのは、10匹ほどの同種の魔犬だとの言つ。かなり賢いのか、お座りの状態でこちらをみている。

「すげ~」

「大きいです……」

「私は遠慮しておきます。シラコキがいますからね」

『シラコキ…』

その名に反応した魔犬が呟く。

「しゃべった！」

「知っているのですか？」

魔犬に聞いてみるとこにした。

『アレハ、フソンダ…』

不遜と言いたいらしい。

確かに思い上がっている風に見えるのかかもしれない。

種族的な違いも大きいと思うのだが、どう思つかは個人の自由だ。

「どう考えるかは、貴方の自由でしょう。しかし、大きいですね」

外見は大型犬のシェパードのようだ。

ただそれに、一周りほど大きくしたサイズなのである。

飛びかかれたら、ひとたまりもなく押し倒されるだろう。

「護衛用にもつてこ」と思わんか？」

「ジーさん護衛用はいいけどよ。食費かかりそうだよな…」

もし、譲り受けたとして世話をすることを考えると、一番金がかかるのは食費だろう。

畜産の村に住んでいたリックからすれば、日々の餌代の方がきつい。

「基本は、朝と夕に食べればよいだけじゃが、森にでも放せば自分で餌をとるだ。」

街中ではそう言ひ訳にもいかないのだが、人間の3倍ほどの量を食べるらしい。食料事情にきつい場所でも、自分のことは自分であるらしくこので、お試しで預かつてみるとことだつた。

「かつこいい。リックこれ欲しい。背中に乗せてくれるかな……。触っちゃダメかな……？」

リファは物怖じしないのか、魔犬に近寄つていく。

「ちょっと毛は硬いね」

はじから触りまくつていいくのだが、魔犬たちはじつとおとなしくすわつてゐる。

命令には忠実なのだ。

「どれを選ぶかとなると難しいです。どうしたら良いと思ひますかスーズさん」

「そうですね。シラコキと念つとも多くなると思つので、シラコキに言い負かされる」とはないと思える魔犬は一歩前に出てください

魔犬同士で、思つともあるのか、シラコキを不遜と告げた魔犬が前にで出る。

「これの名前は？」

「H-07ですね。名前は今の時点ではありません。持ち主となつた方の好みで名前はあつたりなかつたりしますね」

助手の青年が、この魔犬の持つ特性や氣をつけるべき注意事項を告げていく。

「よろしくね。名前はあつたほうがいいよね？」

「好きにつければ良いと思いますが…」

「名前はジーフイでどうかな？」

『ワカツタ、ジーフイダナ』

リファの手を軽く舐めて了承する。

「言い忘れたが、これでまた7ヶ月じゃ。成犬になればもっと大きくなるが、成長が安定すれば自分で大きさを変えることが出来るはずなんじゃ便利じやぞ。ただ確実に出来るのかわからん。珍しいことが起きた場合に知らせてくれると助かる」

どうも改良して生まれたのはよいのだが、Hシリーズはまだまだ未知数な部分がありすぎで、それを知る為の報告を定期的に欲しいとのことであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933y/>

エブラード王国物語 - 異界の魔獣使い -

2011年11月23日20時33分発行